

「実」と「身」から、日本文化の古層を探る。

「実」「身」の初期用例として、古事記を概観し、同じ音の「み」として、「実」と「身」の違いを確認する。

本論は、特に、以下の「**隠身**」と「**物実**」について、その意味を比較する。「**隠身**」については、2, 3ページ 「**物実**」については、4ページで考察する。

序で、イザナギとイザナミが天つ神・国つ神を生む禊の意に、**滌身**(みをすすく)があり、一方、同じく序に、**正実**(まこと)、つまり**真実**の帝紀と本辞の著作を天皇が詔(みことのり)した。

前者は、神のからだを水によって清めることで、新たな神を生んだということで、母体としての**物理的な「み」**が「**身**」である。

後者は、**正しい物事**という概念として**抽象的な「み」**が「**実**」である。本来の「**実**」は、物理的な「**実**」を示す前に、このような意味が先行していたことを指摘したい。

① 本文に入り、別天神五柱～神世七代で、「身」は「**隠身**」として用いられ、神の形容を表す。では、この「**隠身**」は、なにを意味するのであろうか？ 次頁考察

イザナギとイザナミの段では、それぞれの自身を示して「**吾身・汝身**」と用いる。黄泉の国で、イザナミは**身自**(みづから)イザナギを追いかけ、逃げたイザナギは、筑紫の河原で禊祓たまい「**身之物**」を脱ぎ十二神を、中つ瀬での禊で十神を生む。(この身の「**物**」から、ある種の神が誕生したことに留意したい)

② アマテラスとスサノオの段では、それぞれの**物實**(ものざね)、つまり**物の概念的な因子**としての「**実**」によって、それぞれの子(神)が成ったとする。つまりこの場合にも、上記用例と同じく、**抽象的な「み」**が「**実**」である。では、この「**実**」は、何を意味するのであろうか？ (**物實**因我物所成、**物實**因汝物所成) … 4ページで考察する

一方、スサノオに切られたオゲツヒメの身に様々な種が生まれる。

大国主神の段では、イナバのウサギの身が多出する。スサノオの試練を受ける大国主神を助けるため、スセリビメは木の「**実**」を授ける。ここで「**実**」は、初めて**物理的な「実**」となった。

スクナヒコナの正体を問うた大国主神に、神産巢日御祖命は「**実に我が子なり**」と答えた。この**実**は、「**まこと**」と読み正しい物事という概念である。

垂仁天皇の段で、常世国からタジマモリが持ち帰った**橘の「実」**がある。これが古事記の最後の「**実**」であるが、「**身**」は、ニニギノミコトから雄略天皇まで、多く用いられる。

原文 古事記上巻 并序

滌身(みをすすく)

臣安萬侶言。夫、混元既凝、氣象未效、無名無爲、誰知其形。然、乾坤初分、參神作造化之首、陰陽斯開、**二靈爲群品之祖**。所以、出入幽顯、日月彰於洗目、浮沈海水、神祇呈於**滌身**。故、太素杳冥、因本教而識孕土產嶋之時、元始綿邈、賴先聖而察生神立人之世。寔知、懸鏡吐珠而百王相續、喫劔切蛇、以萬神蕃息與。議安河而平天下、論小濱而清國土。

正実(まこと)における「**実**」

於是天皇詔之「朕聞、諸家之所賣帝紀及本辭、既違**正實**、多加虛僞。當今之時不改其失、未經幾年其旨欲滅。斯乃、邦家之經緯、王化之鴻基焉。故惟、撰錄帝紀、討覈舊辭、削僞**定實**、欲流後葉。」時有舍人、姓稗田、名阿禮、年是廿八、爲人聰明、度日誦口、拂耳勒心。即、勅語阿禮、令誦習帝皇日繼及先代舊辭。然、運移世異、未行其事矣。

古事記上巻 (本文)

・別天神五柱～神世七代

天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神訓高下天、云阿麻。下效此、次高御産巢日神、次神産巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、**隠身**也。

次、國稚如浮脂而久羅下那州多陀用幣流之時流字以上十字以音、如葦牙、因萌騰之**物**而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神此神名以音、次天之常立神。訓常云登許、訓立云多知。此二柱神亦、獨神成坐而、**隠身**也。

上件五柱神者、**別天神**。

次成神名、國之常立神訓常立亦如上、次豊雲上野神。此二柱神亦、獨神成坐而、**隠身**也。

③ 以下については、「**隠身と霊の対比**」として、2ページ以下で考察する。

次成神名、宇比地邇上神、次妹須比智邇去神此二神名以音、次角杵神、次妹活杵神二柱、次意富斗能地神、次妹大斗乃辨神此二神名亦以音、次於母陀流神、次妹阿夜上訶志古泥神此二神名皆以音、次**伊邪那岐神**、次妹**伊邪那美神**。此二神名亦以音如上。… (**二靈**爲群品之祖 **隠身**ではない)

上件、自國之常立神以下伊邪那美神以前、并稱神世七代。上二柱獨神、各云一代。次雙十神、各合二神云一代也。

「**隠身**」についての考察

「**隠身**」の語から、その古代の感覚を考察する。
 それは、「見えないモノ、チカラ」の気配を感じるころである。
 古事記は、初めに誕生する、「天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)」「高御産巢日神(タカミムスヒノカミ)」「神産巢日神(カミムスヒノカミ)」「宇摩志阿斯訶備比古遲神(ウマアシカビヒコチノカミ)」「天之常立神(アメトコタチノカミ)」「國之常立神(クニトコタチノカミ)」「豊雲上野神(トヨクモノカミ)」は、「**隠身**」なりとする。

上田正昭先生は、この記述から、目に見えない「**隠身**」、これを日本語の「カミ」の語源とする説を、説得力があると支持される。(『日本人のこころ』より)

『日本書紀』は、天孫降臨する前の葦原中国について、精霊の活躍する**幽暗**な(うすくらしい)呪術の世界とする。また、『常陸国風土記』では、先住する体が蛇で頭に角がある「**夜刀の神**」と、西方から進出してきた稲作の水田開墾者とが交渉し「夜刀の神」を祀ることで決着する。大和の三輪山では**蛇神**が祭られ、豪族の娘と結ばれて三輪氏の祖となる。その神は『日本書紀』ではスサノオの子の大物主神とされ、平安時代の始めには「名神大社」の一つとなって五穀豊穡をもたらす**農耕神**として国家から奉幣された。これらが、「カミ」として描いた古代の感覚である。

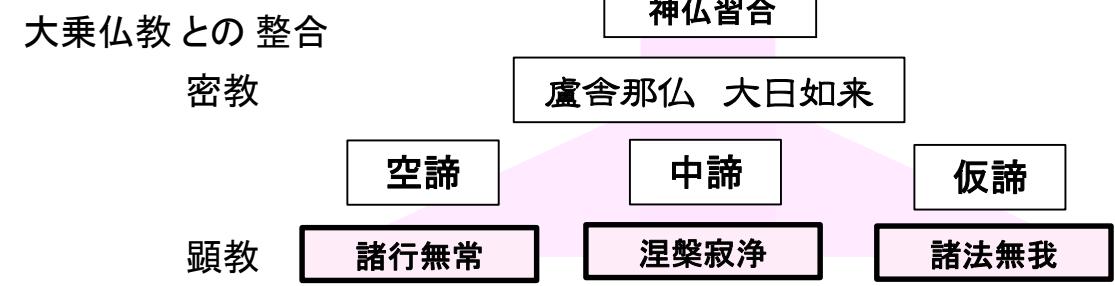
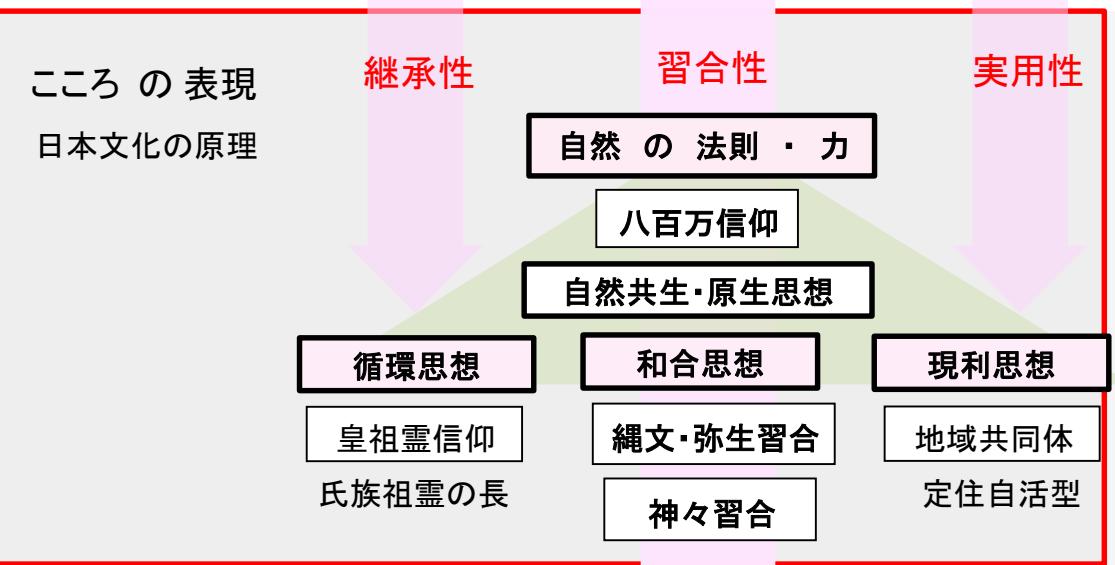
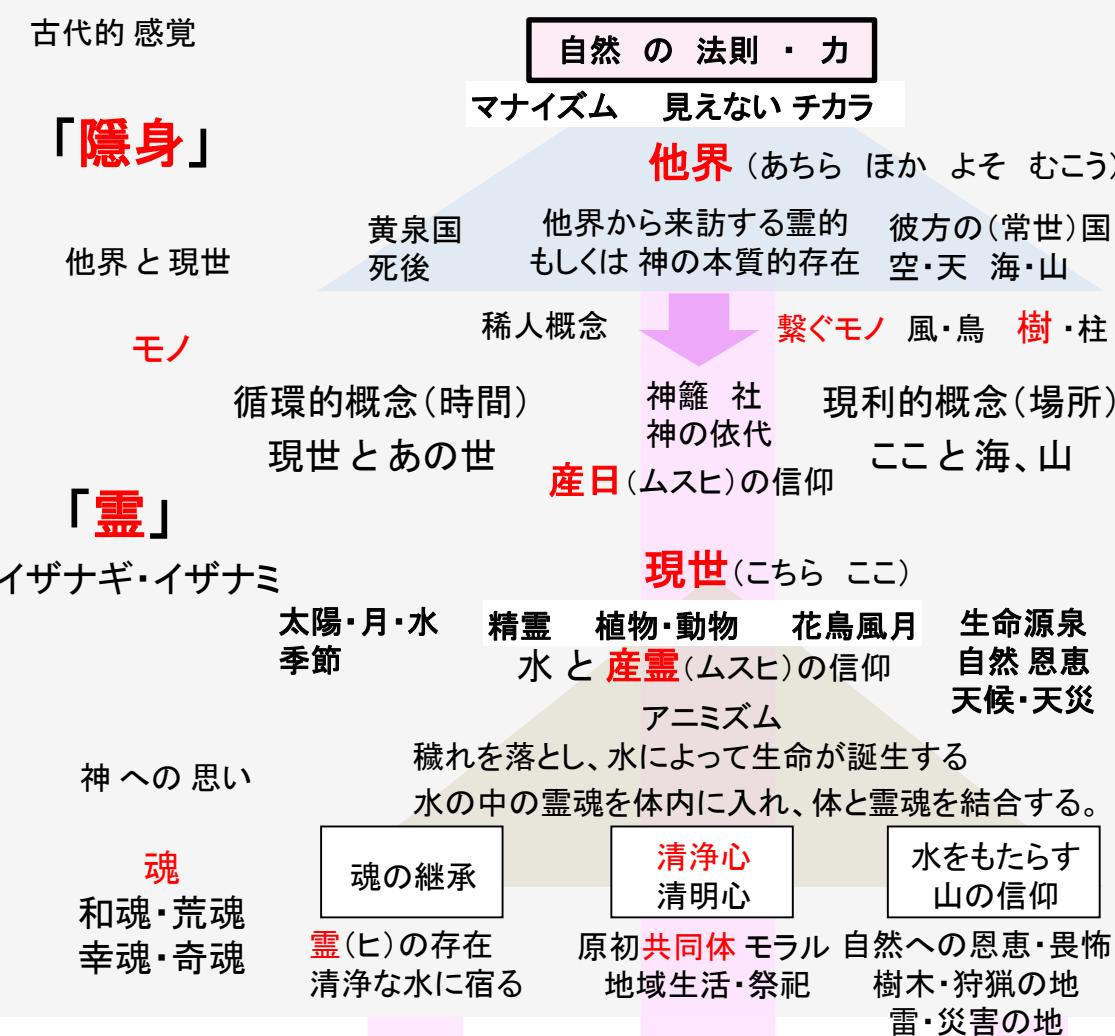
『日本書紀』一書曰、天忍穗根尊、娶高皇産靈尊女子栲幡千千姫萬幡姫命・亦云高皇産靈尊兒火之戸幡姫兒千千姫命、而生兒天火明命、次生天津彦根火瓊瓊杵根尊。其天火明命兒天香山、是尾張連等遠祖也。及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原中國也、高皇産靈尊、勅八十諸神曰「葦原中國者、**磐根・木株・草葉、猶能言語(なおよくモノ言う)**。夜者若燦火而喧響之(夜はホベのモロコにオトナイ)、晝者如五月蠅而沸騰之(昼はサバエナすワキあがる)」云々。

逆にそのあとの神々は、「**隠神**」とはされず、別の概念である。

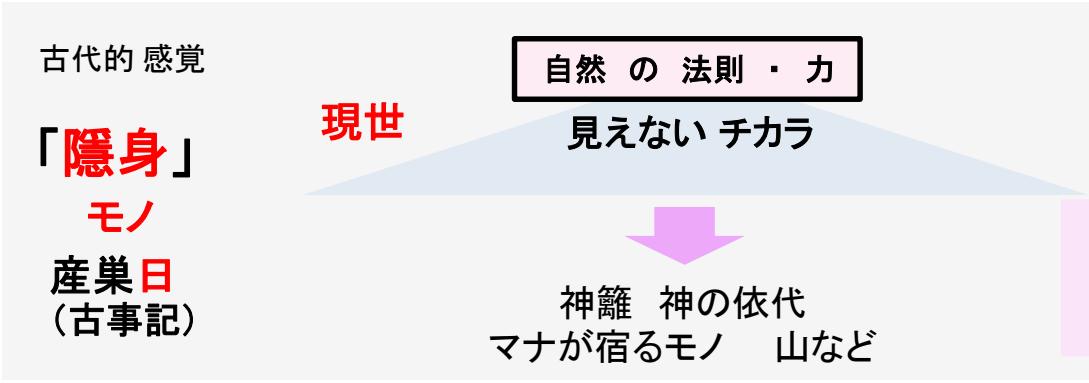
特に、伊邪那岐命(イザナギ)・伊邪那美命(イザナミ)については、序文で「**二霊**為群品之祖神」と記す。つまり万物の生みの親として神名に「**霊**」の文字が使われている。

前述の「**隠身**」は、彼らの神名が「**霊**」を保持せず、万物生命の誕生とは直接に関係が無い。そして**非人格的**な「見えないモノ、チカラ」として記されていることに注目しなければならない。
 特に、「高御産巢日神」と「神産巢日神」は、**産巢日(ムスヒ)**神として超自然的な力を保持する。あえて神名に「**霊**」を持ちないマナとして表現されている。中西進先生は著書『こころの日本文化史』の中で、「マナ」から日本語としての「**モノ**」への母音交替を指摘、縄文土器に超越的な力の表現をみる。そして「大物主大神」のモノであり、モノが依りついた三輪山の神である、とされる。その著書では触れてはいないが、既に古事記神代記に「物」は登場し、萌え上がった物から神が誕生したとあり、力としてのモノを表現している。

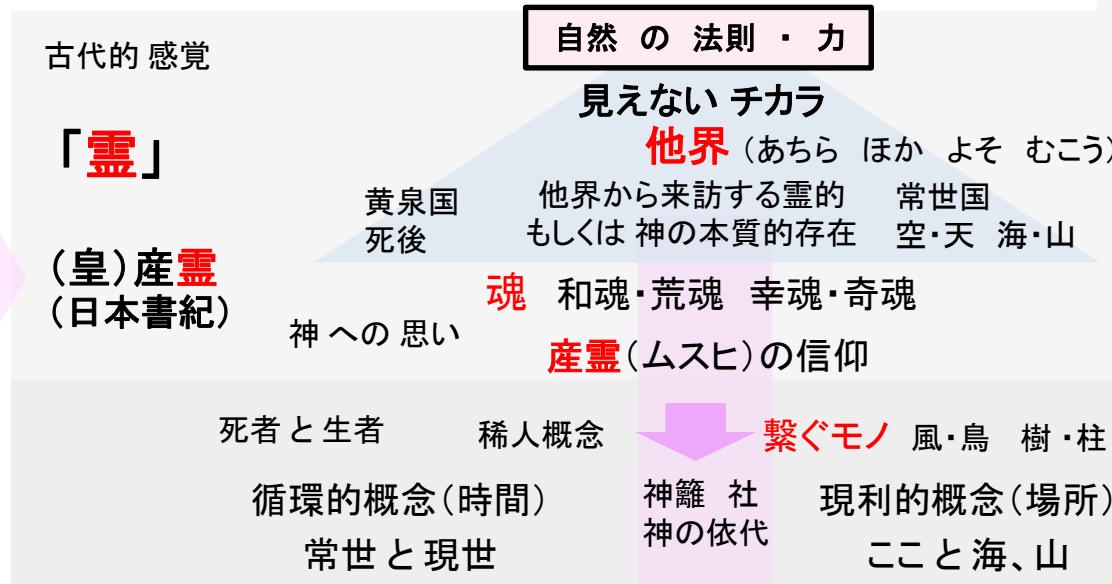
日本の原始的信仰宗教としてアニミズムとする見解が、ごく一般的だが、実は、**マナイズム**を想定しないと「**隠身**」は説明できない。超自然的存在・対象に人格的要素を認めるもの、すなわち**人格的超自然観**を**アニミズム**と呼び、これに対して**非人格的超自然観**を**マナイズム**・アニマティズム・プレ=アニミズムなどと呼ぶ。アニミズムは、宗教の起源を論じたイギリスの人類学者タイラーが提唱した原始宗教の生命万物の「**霊**」観念である。その後マレットは、コドリントンがポリネシア信仰で紹介した超自然的・神秘的で非人格的な力への信仰に注目し、アニミズムの前段階の観念としてマナ、マナイズムを定義した。**マナイズム**は**靈魂**の存在を前提とせず、超自然的な力そのものが**物体**その他に宿ると信じる。自然物、自然現象に対する尊敬や畏怖(いふ)の態度の総称である。



マナイズム 見えないチカラ (非人格的要素)



アニミズム 見えないチカラ (人格的要素) 霊・魂



マナイズムにおける見えないチカラには、死後の他界観はない。あくまでも非人格的要素を持つ。アニミズムは、人格的要素として**霊の観念**を持ち、その観念における見えないチカラは、死後の他界観における見えない**霊**と、現世における見えない**霊**の二種がある。

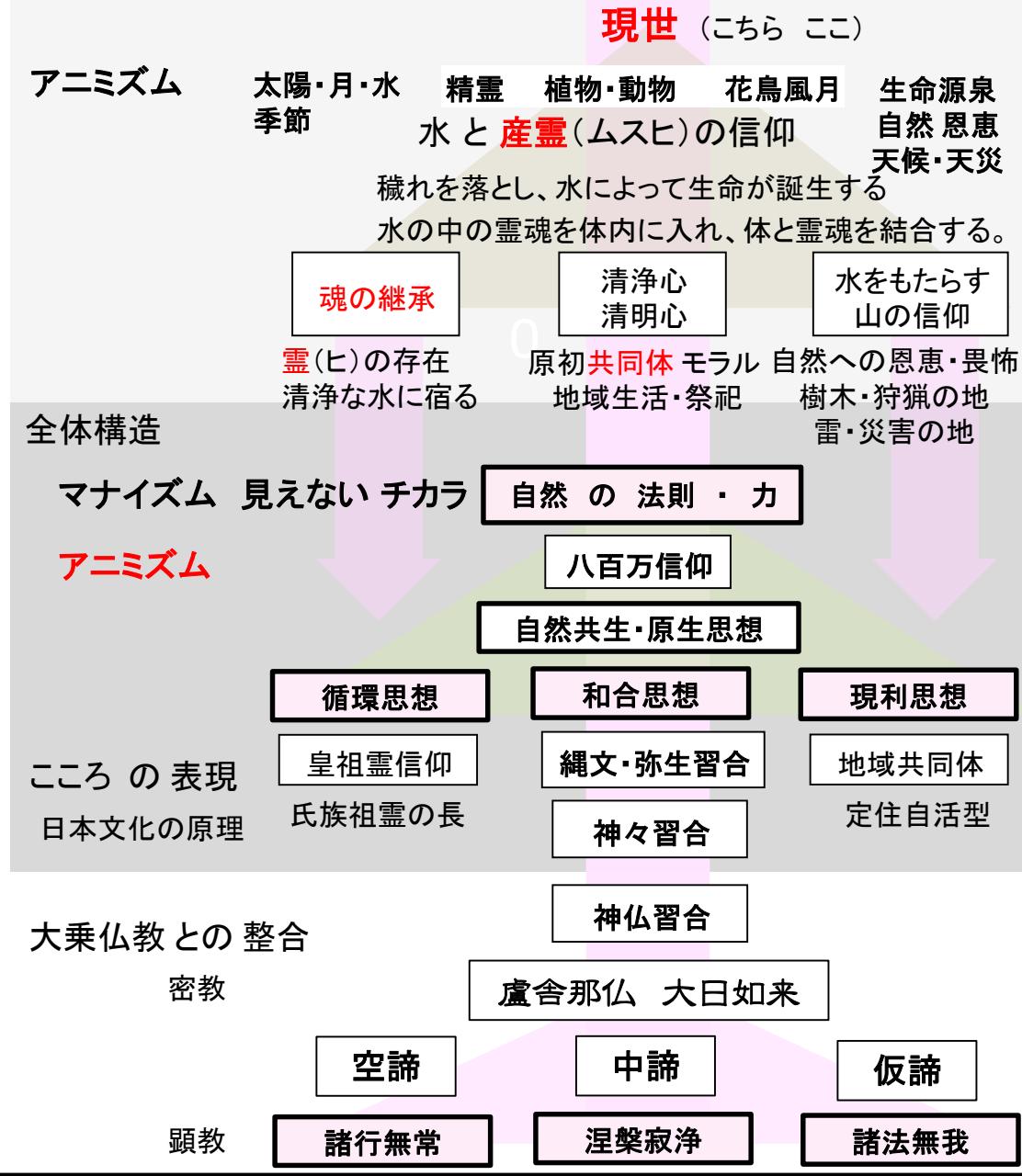
このことが日本文化にとって重要だが、現世においては、見えないチカラを持つものとしての「**隠身**」の**モノ**と、同じく見えない存在としての**霊**が存在すると観念される。

我が国では特に民俗学的に死後を含む「**他界の世界**」が身近であるとの見解がある。なぜであろうか？その理由として、マナイズムの**モノ**とアニミズムの**霊**が、それぞれの**見えないもの**、**存在という共通性**を媒介に、同一視されていくところにあるのではないかと仮説する。つまり、身近な**モノ**が、本来は死後を含む**他界**の存在である**霊**の観念を引き寄せて、**霊**までも身近に観念させたのではないかと考える。**モノ**に対する愛着もそのようなところの顕れである。しかしながら、そもそも**モノ**と**霊**に対する観念は、別々の概念であることを認識しなければならない。なぜなら**モノ**には、死後の他界観は無いからである。

現国際日本文化研究センター所長の小松和彦先生の著書『鬼がつくった国・日本』の中で、「鬼」とは、説話などで語られる「**想像上の鬼**」、もしくは周囲や自分自身がその子孫と信じていた「**実在の鬼**」で、反体制的で村落共同体の外にいる人々のこととする。(同著P11)【以下要点】我が国で、「**闇**」「**異界**」、そして「**他界**」は、「**実在**」「**想像**」を問わず、「**人間界**」(この世)と明確に断絶した世界ではない。その世界の「**実在**」や「**想像**」の「**鬼**」や「**神**」、「**妖怪**」、さらに「**死後の世界**」は、「**日常**」に対し、ある部分で重層した「**非日常**」的な意識の世界に存在したと言える。

その非断絶・重層の理由は何であろうか？ 当論は、それを**自然環境**と考える。なぜなら、小松先生の著書『異世と日本人』では、「**想像上の鬼**」つまり、人々の恐怖の対象が「**自然**」から始まり、また、同センター名誉教授の久野昭先生の著書『日本人の他界観』では、**死後の意味**としての「**他界**」は、ほとんど現世と隣り合わせといってもいいくらい意外に**親しい**世界、とする。そして、その理由を日本という精神風土に長く続いてきた**他界**とのかかわり、とする。その「**日本という精神風土**」は、自然世界の盛衰・生死が身近である風土がもたらした、「**無常感**」をもつ精神を示す、と考える。

非断絶・重層の理由について、上記で、マナイズムの「**モノ**」とアニミズムの「**霊**」が、それぞれの**見えないもの**、**存在という共通性**を媒介に、同一視されていくところにあるのではないかと仮説したが、まさに**自然環境**がもたらした観念である。**マナイズム**とは、**自然物**、**自然現象**に対する尊敬や畏怖の態度の総称であり、これはまた現代的な課題でもある。小松先生は、鬼や妖怪の棲む「**闇**」や「**異界**」は、人間に対して「**道德**」の役割を持ち、人間社会の矛盾や自身の不正、罪悪感からくる恐怖心の現れとする。そして、現代は、「**空間**」や「**時間**」に画一的に「**光**」があり、その「**見える(あるいは、見えると思ひこんでいる)時代**」に、見えない「**闇**」や「**異界**」の意義を指摘される。



「物實」についての考察

前置き 古事記には、自然と人間、そして異なる文化の習合として三貴神の物語が描かれている。以下、「物実」の意味、さらにその物実の内容について考察する。まず、その前段からたどっていく。伊邪那岐(いざなぎ)神と伊邪那美(いざなみ)神は、古事記の序文で「二靈為群品之祖神」と記される。万物の生みの親としてその神名に「靈」の文字が使われ、国生みや神生みを成す。ここで重要なことは、その二神によって「死」と、「生の穢れ」と「再生」が描かれていることである。死後、黄泉の国に行った伊邪那美神と、そのから引き返した邪那岐神との間で、「千引き石」を境に人間の生死を宣言している。伊邪那美神は、神として始めて死ぬが、伊邪那岐神は多賀に坐す(古事記)、もしくは淡路に隠れた(日本書紀)とされる。また人間を自然と断絶せず「青人草」「人草」と表現している。

これらの伊邪那岐神と伊邪那美神との物語で、「靈」と関係して記述される一連の内容は、我が国文化の古層として、「自然と人間との共通概念」を論証するために重要な手がかりである。

また、柳田國男の研究者で石文化研究所の小畠宏充所長は著書『日本人のお墓』で、伊邪那美を「自然」(ものの次元)、伊邪那岐を「文化」(たまの次元)と解釈し「千引き石」を文化的な墓石の原点とする。

最後、其妹伊邪那美命、身自追來焉。爾千引石引塞其黄泉比良坂、其石置中、各對立而、度事戸之時、伊邪那美命言「愛我那勢命、爲如此者、汝國之人草、一日絞殺千頭。」爾伊邪那岐命詔「愛我那邇妹命、汝爲然者、吾一日立千五百産屋。」是以、一日必千人死・一日必千五百人生也。故、號其伊邪那美神命、謂黄泉津大神。亦云、以其追斯伎斯此三字以音而、號道敷大神。亦所塞其黄泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黄泉戸大神。故、其所謂黄泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也。

「物實」(ものざね)における「実」 誓約 モノから神 出雲と大和 伊勢と出雲

アマテラスとスサノオとの誓約によって、人間社会の異なる系統が、習合した。その因子を記は「物実」とする。物実は、因子たる特性を意味し、記は、異なる特性を持つものの習合、自然調和な日本文化を表現している。

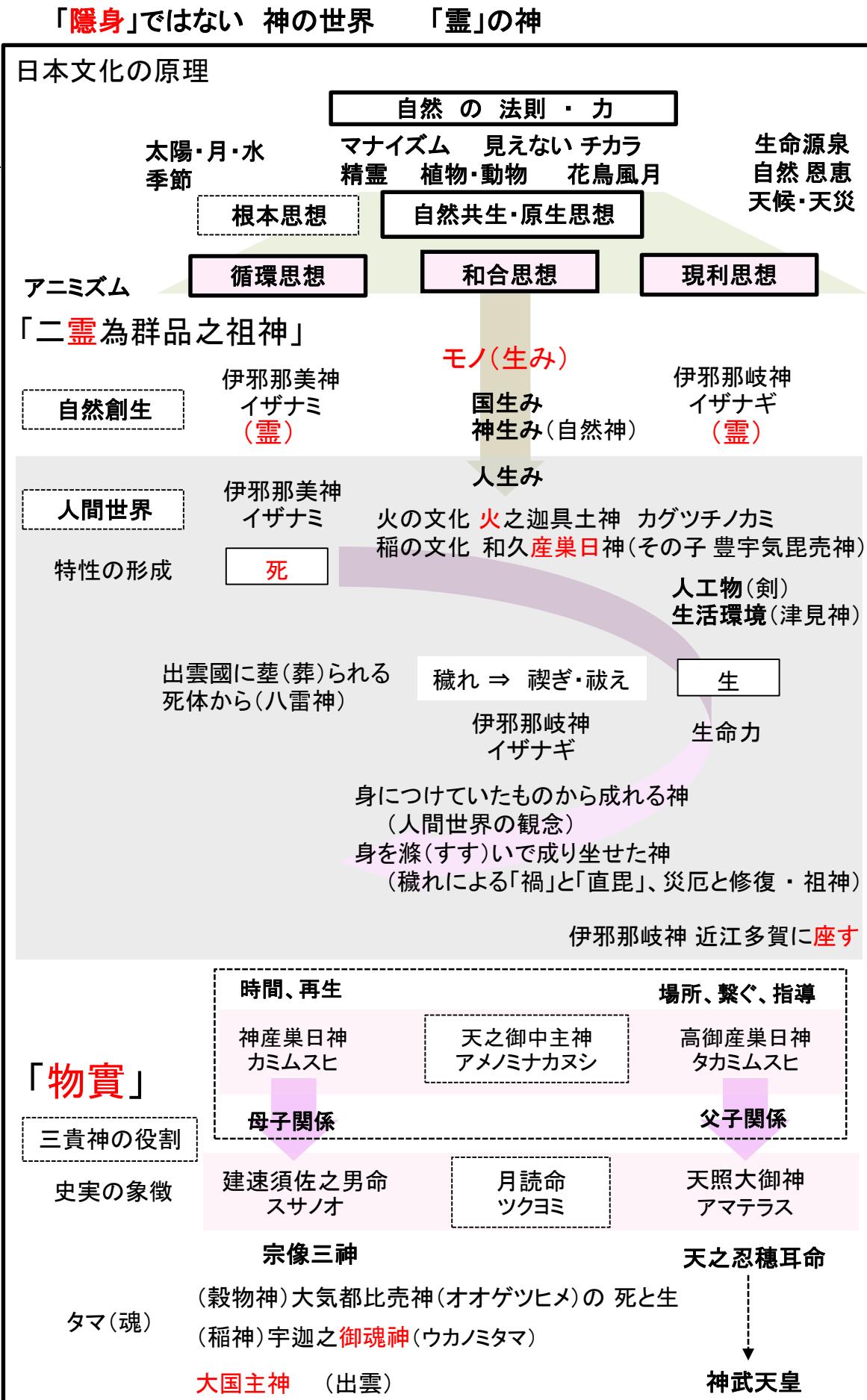
その言葉に、本論の冒頭で示した「正實」(まこと)の「実」が用いられていることが、重要である。また、「物」の実とされ、我「物」、汝「物」の「物」にあるように、マナイズムとして、「物」のチカラが表現されている石井一良先生は『思想史 I』で、「記」「紀」神話や、『風土記』などの説話は、縄文時代の古いカミガミ(精霊と云った方がよい)が水稲耕時代の新しい神々と葛藤し、結合し、癒着し、それに吸収されたプロセスを反映しているとされる。当方考察 スサノオ: 縄文から弥生 磐座と銅鐸 出雲 アマテラス: 製鉄と絹織 銅鏡 東遷

爾速須佐之男命答曰「僕者無邪心、唯大御神之命以、問賜僕之哭伊佐知流之事。故、白都良久三字以音、僕欲往妣國以哭。爾大御神詔、汝者不可在此國而、神夜良比夜良比賜。故、以爲請將罷往之狀、參上耳。無異心。」爾天照大御神詔「然者、汝心之清明、何以知。」於是、速須佐之男命答曰「各宇氣比而生子。」自宇以下三字以音、下效此。

故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母母由良邇此八字以音、下效此振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而自佐下六字以音、下效此、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命此神名以音、亦御名、謂奥津嶋比賣命。次市寸嶋上比賣命、亦御名、謂狹依毘賣命。次岐都比賣命。三柱、此神名以音。

速須佐之男命、乞度天照大御神所纏左御美豆良八尺勾璫之五百津之美須麻流珠而、奴那登母母由良爾、振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。亦乞度所纏右御美豆良之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天之菩卑能命。自菩下三字以音。亦乞度所纏御縵之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天津日子根命。又乞度所纏左御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、活津日子根命。亦乞度所纏右御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、熊野久須毘命。自久下三字以音。并五柱。

於是天照大御神、告速須佐之男命「是後所生五柱男子者、物實因我物所成、故、自吾子也。先所生之三柱女子者、物實因汝物所成、故、乃女子也。」如此詔別也。



「自然(しぜん)調和、自然(じねん)調和への思考」の事例として「**草木国土悉皆成仏**」という言葉がある。その言葉と関連し、梅原猛先生の成句である「山川草木悉皆成仏」や「山川草木悉有仏性」が流布しているが、そのことを仏教經典に典拠なし、と指摘する末木文美士先生の著書『草木仏性の思想』がある。

しかし、そもそも「草木国土悉皆成仏」が、インドの原語や中国の經典になく、我が国の天台宗、比叡山の僧侶、安然(あんねい)による成句であることに注目しなければならない。安然が、著書『斟定草木成仏私記』の中で、『中陰経』に書かれている妙覚如来の神通力を解釈し作り出した言葉である。だが『中陰経』の記述は「天から地獄までのあらゆる有情が仏になる」という内容で、いわゆる無情(心のはたらきのないもの 植物や無生物)である「草木」は含まれていない。つまり、『中陰経』に基づく仏教の「有情成仏」だけではなく、「無情成仏」までも含む考えが、「草木国土悉皆成仏」である。この段階で、すでに仏教を超えているか、もしくは日本的に変質していることを認識しなければならない。この**安然の思想**は、その後、同じ天台宗の良源『草木発心修行成仏私録』や源信『三十四箇事書』(枕双紙の異本)に影響を与え、さらに現代では、冒頭に提示した「山川草木悉皆成仏」と編集されるほど我が国に定着し受け入れられた。ではなぜ、安然は、そのような言葉、思想をいだいたのか？

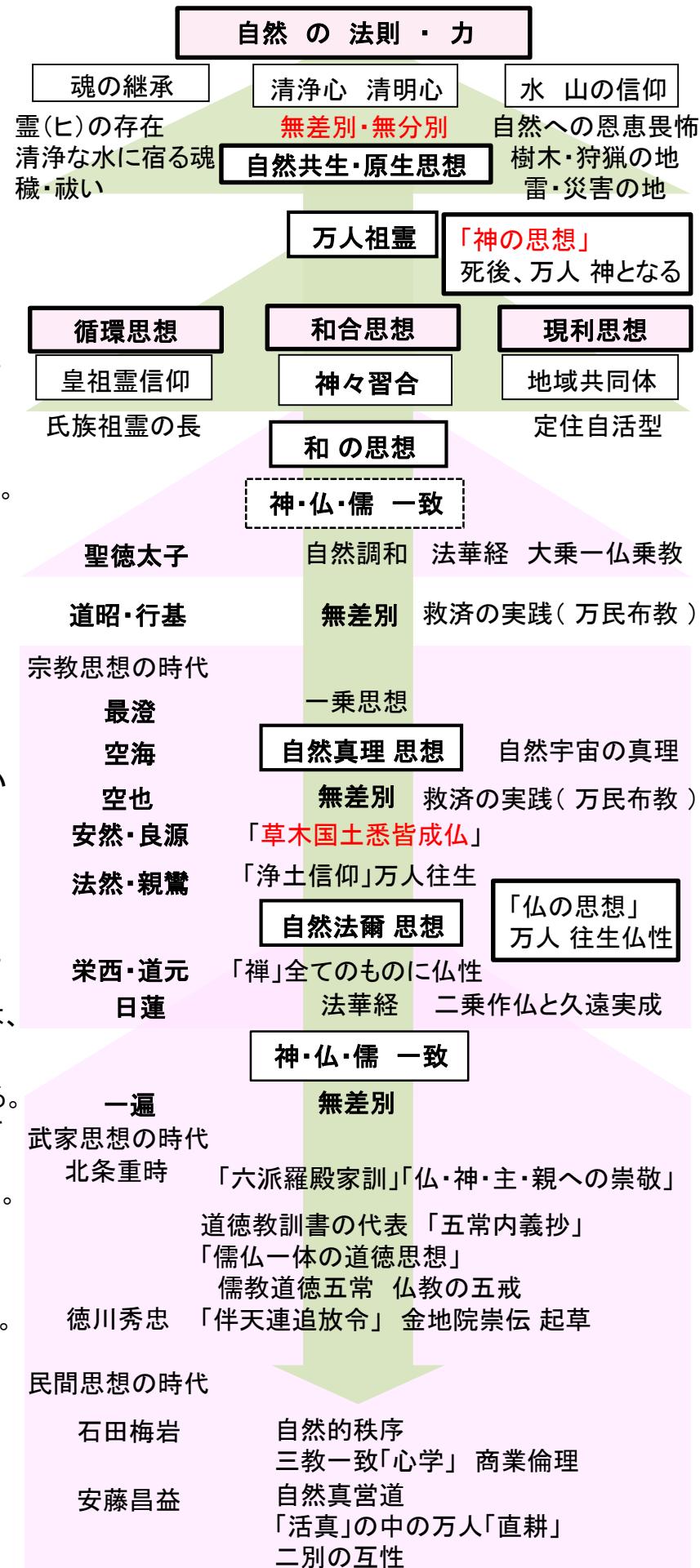
前提として、その時代までの、「草木国土悉皆成仏」に関連する言葉を考える。まず、「**一切衆生悉有仏性**」の言葉は、『涅槃経』に登場し、その「衆生」とは梵語の「サツヴァ」であるが、唐の玄奘は「衆生」ではなく「有情」という訳語を当てた。「有情」は前述の「無情」に対する「心のはたらきのあるもの 六道の中の間・動物・その他」のことである。つまり、ここでも「草木」は含まれない。その点で、上記の『中陰経』と同様である。次に、「**山川草木**」の言葉は、漢籍や密教經典、『日本書紀』に用いられている。『日本書紀』では、イザナギとイザナミによる「国生みの段」で登場するが、二神が「山川草木」を生んだ後、アマテラス(大日靈貴)誕生や、「人間の誕生や死」の主役であることに注目しなければならない。つまり、我が国の「**自然と人間との共通概念**」が、ここにある。さらに古事記に、その概念はもつとわかりやすく記述されている。初めに誕生する、「天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)」「高御産巢日神(タカミムスヒノカミ)」「神産巢日神(カミムスヒノカミ)」「宇摩志斯訶備比古遲神(ウマシカビヒコチノカミ)」「天之常立神(アメトコタチノカミ)」「國之常立神(クニトコタチノカミ)」「豊雲上野神(トヨクモノカミ)」は、「**隠身**」なりとする。一方そのあとに生まれる伊邪那岐命(イザナギ)・伊邪那美命(イザナミ)については、その序文で「**二靈為群品之祖神**」と記す。つまり**万物の生みの親**として神名に「靈」の文字が使われていることが重要である。古事記で3ヶ所しか用いられない「靈」は、我が国の「**自然と人間との共通概念**」にとって重要な言葉である。

「次生海、次生川、次生山、次生木祖句句迺馳、次生草祖草野姫、亦名野槌。既而伊弉諾尊・伊弉冉尊、共議曰「吾已生大八洲國及**山川草木**。何不生天下之主者歟」於是、共生日神、號大日靈貴。大日靈貴、此云於保比屢咩能武智、靈音力丁反。一書云天照大神」

『草木仏性の思想』から引用 安然は多様な世界の真理を唯一の根源へ集約していった。それが密教の「大日如来」であり、さらに理論的に原理を探求し、その根源を「**真如**」と呼んだ。この世界はすべてが真如の活動からなっていることから、有情も無情もすべて真如そのものであり、区別できない。人間も草木もすべて仏の世界の顕れで、同じように発心・成仏できるとした。しかし本来の仏教は、「諸法無我」「諸行無常」であり、あらゆるものは相互の縁起による現象で、根源的な実在を求めていない、と矛盾を提示する。

つまり安然の「真如」は、もはや本来の仏教では解釈できず、仏教の中では密教にその答えを求めざるを得ないことになったわけである。このことは、自然と密接する日本の変質、特質と考えなくてはならないであろう、と考える。自然への信仰は、密教の宇宙根本仏としての大日如来と親和する。密教が本来的にもつ包容的な性格は、わが国の民族信仰を摂取して神仏習合思想に理論的な基盤を与え、本地垂迹説を生み出し、山岳信仰を包摂して修験道を形成した。わが国の風俗習慣と広く結びついて、庶民信仰の中に深く根を下した。

著者も指摘する「理解を超えた不思議な力、科学では解明できない 自然(しぜん)」について、安然はその根源を「真如」と名付けた。人間などの有情と草木などの無情との共通性を、「了解不可能な他者性」に見出すが、本論でも指摘している原理の頂点である。著者は、「日本古来のアニミズム」について批判的だが、木や岩が神聖視されたり、蛇や狐が神、または神の使いとされることは認める。自然物すべてを神と崇めるということはなかったと「思われる」、と断定はせず、卑弥呼のシャーマニズムの傾向を強調する。一方、古事記からは、国の民を表す「**青人草**」「**人草**」の表現を根拠に、人間と草木の境界はないとする。日本人の災害観として、平安時代の、自然災害を「崇り」によるものとしたこと、病気を「怨霊」によるものとしたことを列記している。そのことから、現世を超えたその背後の靈や神仏との関係を重視したことや、非科学的、非合理的な思考を見出し、今日の科学的、合理的解釈(偏重的判断)に警鐘を鳴らす。いずれにせよ「真如」の思想、「草木国土悉皆成仏」という言葉の解釈には、我が国の**自然観**として「自然の法則・力」「見えないうチカラ」の想定が必要である。上記のアニミズム、シャーマニズム、さらに本論が提示したマナイズムなどとの関係はともかく、大事なことは、我が国において仏教や儒教を受容し変化させる、根本としての自然観、日本文化が存在した事実である。





① 天地初發

あめつちはじめてあらわれしとき

天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)
高御産巢日神(たかみむすひのかみ)
神産巢日神(かむむすひのかみ)

造化の三神

ぞうかのさんしん

建速 須佐之男命
(たけはやすさのおのみこと)
天照大御神
(あまてらすおおみかみ)
月読命
(つくよみのみこと)

⑥ 三貴神

⑦ アマテラスとスサノオの誓約

天岩屋戸

天降り

国宝 海部氏「勘注系図」、物部氏「先代旧事本紀」で彦火明命は別名、**天火明命**、**邇芸速日命**(ニギハヤヒ)、天照國照彦天火明櫛玉邇速日命(尊)

⑧ 国譲

大国主 武御雷神

⑨ 天孫降臨

天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能 **邇邇芸命**
(あめにきしくににきしまつひこひこほの ににぎのみこと)
三種の神器
大山津見神の娘、木花佐久夜毘売と結婚

⑩ 海幸彦・山幸彦

⑪ 東征

② イザナギとイザナミ

共生み

④ 神産み

③ 国生み

⑥ 三貴神

⑤ イザナギ 身禊

月読命

住吉三神

天照大御神

建速 須佐之男命

宇迦之御魂神

うかのみたまのかみ

宗像三神

市寸嶋比売命

天火明命

あめのほあかりのみこと

邇邇芸命

(ににぎのみこと)

出雲神話

大国主神

神武天皇

美和之 **大物主神** 勢夜陀多良比賣(せやたたらひめ)の娘
富登多多良伊須須岐比賣命(ほとたたらいすすきひめのみこと)と結婚

迦毛大御神

「山城国風土記」

賀茂別雷命・賀茂建角身命・神伊可古夜日売・玉依日売

火之迦具土神

ひのかぐつちのかみ

豊宇气毘売神

とようけのかみ

武御雷神

たけみかずちのかみ

闇淤加美神

くらおかみのかみ
日本書紀:高麗
たかおかみ(のかみ)

木花佐久夜毘売

このはなさくやびめ

大山咋神

おおやまいのかみ

「八幡」神
『続日本紀』天平9年(737)初見
天平勝宝元年(749)宣命
「広幡乃八幡(ヤハタ)大神」
九州宇佐から、八幡 神入京
* 小野妹子「三宅八幡宮」
社伝 推古天皇15年(607)遣隋後

日本書紀一書曰、**大國主神**、亦名 **大物主神**、亦號國作 **大己貴命**、亦曰 葦原醜男、亦曰八千戈神、亦曰 大國玉神、亦曰 顯國玉神。

・伊邪那岐命と伊邪那美命

於是天神、諸命以、詔伊邪那岐命・伊邪那美命二柱神「修理固成是多陀用幣流之國。」賜天沼矛而言依賜也。故、二柱神、立訓立云多多志天浮橋而指下其沼矛以畫者、鹽許々袁々呂々邇此七字以音畫鳴訓鳴云那志而引上時、自其矛末垂落之鹽累積、成嶋、是淤能基呂嶋。自淤以下四字以音。

於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿。於是、問其妹伊邪那美命曰「汝身者、如何成。」答曰「吾身者、成成不成合處一處在。」爾伊邪那岐命詔「我身者、成成而成餘處一處在。故以此吾身成餘處、刺塞汝身不成合處而、以爲生成國土、生奈何。」訓生、云字牟。下效此。伊邪那美命答曰「然善。」爾伊邪那岐命詔「然者、吾與汝行迴逢是天之御柱而、爲美斗能麻具波比此七字以音。」

如此之期、乃詔「汝者自右迴逢、我者自左迴逢。」約竟迴時、伊邪那美命、先言「阿那邇夜志愛上袁登古袁。此十字以音、下效此。」後伊邪那岐命言「阿那邇夜志愛上袁登賣袁。」各言竟之後、告其妹曰「女人先言、不良。」雖然、久美度邇此四字以音興而生子、水蛭子、此子者入葦船而流去。次生淡嶋、是亦不入子之例。

於是、二柱神議云「今吾所生之子、不良。猶宜白天神之御所。」即共參上、請天神之命、爾天神之命以、布斗麻邇爾上此五字以音卜相而詔之「因女先言而不良、亦還降改言。」故爾反降、更往迴其天之御柱如先、於是伊邪那岐命先言「阿那邇夜志愛袁登賣袁。」後妹伊邪那美命言「阿那邇夜志愛袁登古袁。」如此言竟而御合生子、淡道之穗之狹別嶋。訓別、云和氣。下效此。次生伊豫之二名嶋、此嶋者、身一而有面四、每面有名、故、伊豫國謂愛上比賣此三字以音、下效此也、讚岐國謂飯依比古、粟國謂大宜都比賣此四字以音、土左國謂建依別。

次生隱伎之三子嶋、亦名天之忍許呂別。許呂二字以音。次生筑紫嶋、此嶋亦、身一而有面四、每面有名、故、筑紫國謂白日別、豐國謂豐日別、肥國謂建日向日豐久士比泥別自久至泥、以音、熊曾國謂建日別。曾字以音。次生伊伎嶋、亦名謂天比登都柱。自比至都以音、訓天如天。次生津嶋、亦名謂天之狹手依比賣。次生佐度嶋。次生大倭豐秋津嶋、亦名謂天御虛空豐秋津根別。故、因此八嶋先所生、謂大八嶋國。

(中略)

最後、其妹伊邪那美命、身自追來焉。爾千引石引塞其黃泉比良坂、其石置中、各對立而、度事戶之時、伊邪那美命言「愛我那勢命、爲如此者、汝國之人草、一日絞殺千頭。」爾伊邪那岐命詔「愛我那邇妹命、汝爲然者、吾一日立千五百產屋。」是以、一日必千人死・一日必千五百人生也。故、號其伊邪那美神命、謂黃泉津大神。亦云、以其追斯伎斯此三字以音而、號道敷大神。亦所塞其黃泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黃泉戶大神。故、其所謂黃泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也。

是以、伊邪那伎大神詔「吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音穢國而在祁理。此二字以音。故、吾者爲御身之禊」而、到坐竺紫日向之橋小門之阿波岐此三字以音原而、禊祓也。

故、於投棄御杖所成神名、衝立船戶神。次於投棄御帶所成神名、道之長乳齒神。次於投棄御囊所成神名、時量師神。次於投棄御衣所成神名、和豆良比能宇斯能神。此神名以音。次於投棄御禪所成神名、道俣神。次於投棄御冠所成神名、飽咋之宇斯能神。自宇以下三字以音。次於投棄左御手之手纏所成神名、奧疎神。訓奧云於伎。下效此。訓疎云奢加留。下效此。次奧津那藝佐毘古神。自那以下五字以音。下效此。次奧津甲斐辨羅神。自甲以下四字以音。下效此。次於投棄右御手之手纏所成神名、邊疎神。次邊津那藝佐毘古神。次邊津甲斐辨羅神。

右件自船戶神以下、邊津甲斐辨羅神以前、十二神者、因脫著身之物、所生神也。

於是詔之「上瀨者瀨速、下瀨者瀨弱。」而、初於中瀨墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神訓禍云摩賀、下效此。、次大禍津日神、此二神者、所到其穢繁國之時、因污垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、神直毘神毘字以音、下效此、次大直毘神、次伊豆能賣神。并三神也。伊以下四字以音。次於水底滌時、所成神名、底津綿上津見神、次底筒之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神、次中筒之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神訓上云字閑、次上筒之男命。

此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音、下效此。故、阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字、以音。其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、墨江之三前大神也。

於是、洗左御目時、所成神名、天照大御神。次洗右御目時、所成神名、月讀命。次洗御鼻時、所成神名、建速須佐之男命。須佐二字以音。

右件八十禍津日神以下、速須佐之男命以前、十柱神者、因滌御身所生者也。

・天照大神と須佐之男命

物實(ものざね)における「実」 誓約 モノから神

爾速須佐之男命答白「僕者無邪心、唯大御神之命以、問賜僕之哭伊佐知流之事。故、白都良久三字以音、僕欲往妣國以哭。爾大御神詔、汝者不可在此國而、神夜良比夜良比賜。故、以爲請將罷往之狀、參上耳。無異心。」爾天照大御神詔「然者、汝心之清明、何以知。」於是、速須佐之男命答白「各宇氣比而生子。」自宇以下三字以音、下效此。

故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母母由良邇此八字以音、下效此振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而自佐下六字以音、下效此、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、**多紀理毘賣命**此神名以音、亦御名、謂奧津嶋比賣命。次**市寸嶋上比賣命**、亦御名、謂狹依毘賣命。次**岐都比賣命**。三柱、此神名以音。

速須佐之男命、乞度天照大御神所纏左御美豆良八尺勾璽之五百津之美須麻流珠而、奴那登母母由良爾、振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、正勝吾勝勝速日**天之忍穗耳命**。亦乞度所纏右御美豆良之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、**天之菩卑能命**。自菩下三字以音。亦乞度所纏御縵之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、**天津日子根命**。又乞度所纏左御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、**活津日子根命**。亦乞度所纏右御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、**熊野久須毘命**。自久下三字以音。并五柱。

於是天照大御神、告速須佐之男命「是後所生五柱男子者、**物實**因我物所成、故、自吾子也。先所生之三柱女子者、**物實**因汝物所成、故、乃汝子也。」如此詔別也。(中略)

「**身**」から生まれる穀物 再生

又食物乞大氣津比賣神、爾大氣都比賣、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於**身**生物者、於頭生蠶、於二目生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆。故是神產巢日御祖命、令取茲、成種。

故、所避追而、降出雲國之肥上河上・名鳥髮地。此時箸從其河流下、於是須佐之男命、以爲人有其河上而、尋覓上往者、老夫與老女二人在而、童女置中而泣、爾問賜之「汝等者誰。」故其老夫答言「僕者國神、大山上津見神之子焉、僕名謂足上名椎、妻名謂手上名椎、女名謂櫛名田比賣。」亦問「汝哭由者何。」答白言「我之女者、自本在八稚女。是高志之八俣遠呂智此三字以音每年來喫、今其可來時、故泣。」爾問「其形如何。」答白「彼目如赤加賀智而、**身**一有八頭八尾、亦其**身**生蘿及檜楡、其長度谿八谷峽八尾而、見其腹者、悉常血爛也。」此謂赤加賀知者、今酸醬者也。

・大國主神

故、此大國主神之兄弟、八十神坐。然皆國者、避於大國主神。所以避者、其八十神、各有欲婚稻羽之八上比賣之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負帑、爲從者率往。於是、到氣多之前時、裸菟伏也、爾八十神謂其菟云「汝將爲者、浴此海鹽、當風吹而、伏高山尾上。」故其菟、從八十神之教而伏、爾其鹽隨乾、其**身**皮悉風見吹拆、故痛苦泣伏者、最後之來大穴牟遲神、見其菟言「何由、汝泣伏。」

菟答言「僕在淤岐嶋、雖欲度此地、無度因。故、欺海和邇此二字以音、下效此言『吾與汝競、欲計族之多小。故汝者、隨其族在悉率來、自此嶋至于氣多前、皆列伏度。爾吾蹈其上、走乍讀度。於是知與吾族孰多。』如此言者、見欺而列伏之時、吾蹈其上、讀度來、今將下地時、吾云『汝者、我見欺。』言竟、即伏最端和邇、捕我悉剥我衣服。因此泣患者、先行八十神之命以、誨告『浴海鹽、當風伏。』故、爲如教者、我**身**悉傷。」

於是大穴牟遲神、教告其菟「今急往此水門、以水洗汝**身**、即取其水門之蒲黃、敷散而、輾轉其上者、汝**身**如本膚必差。」故、爲如教、其**身**如本也。此稻羽之素菟者也、於今者謂菟神也。故、其菟白大穴牟遲神「此八十神者、必不得八上比賣。雖負帑、汝命獲之。」(中略)

於是、其妻須世理毘賣者、持喪具而哭來、其父大神者、思已死訖、出立其野。爾持其矢以奉之時、率入家而、喚入八田間大室而、令取其頭之虱、故爾見其頭者、吳公多在。於是其妻、取牟久木**實**與赤土、授其夫、故咋破其木**實**、含赤土唾出者、其大神、以爲咋破吳公唾出而、於心思愛而寢。

故、大國主神、坐出雲之御大之御前時、自波穗、乘天之羅摩船而、內剥鵝皮剥爲衣服、有歸來神。爾雖問其名不答、且雖問所從之諸神、皆白不知。爾多邇具久白言自多下四字以音「此者、久延毘古必知之。」即召久延毘古問時、答白「此者神產巢日神之御子、少名毘古那神。」自毘下三字以音。故爾、白上於神產巢日御祖命者、答告「此者、**實**我子也。於子之中、自我手俣久岐斯子也。自久下三字以音。故、與汝葦原色許男命、爲兄弟而、作堅其國。」

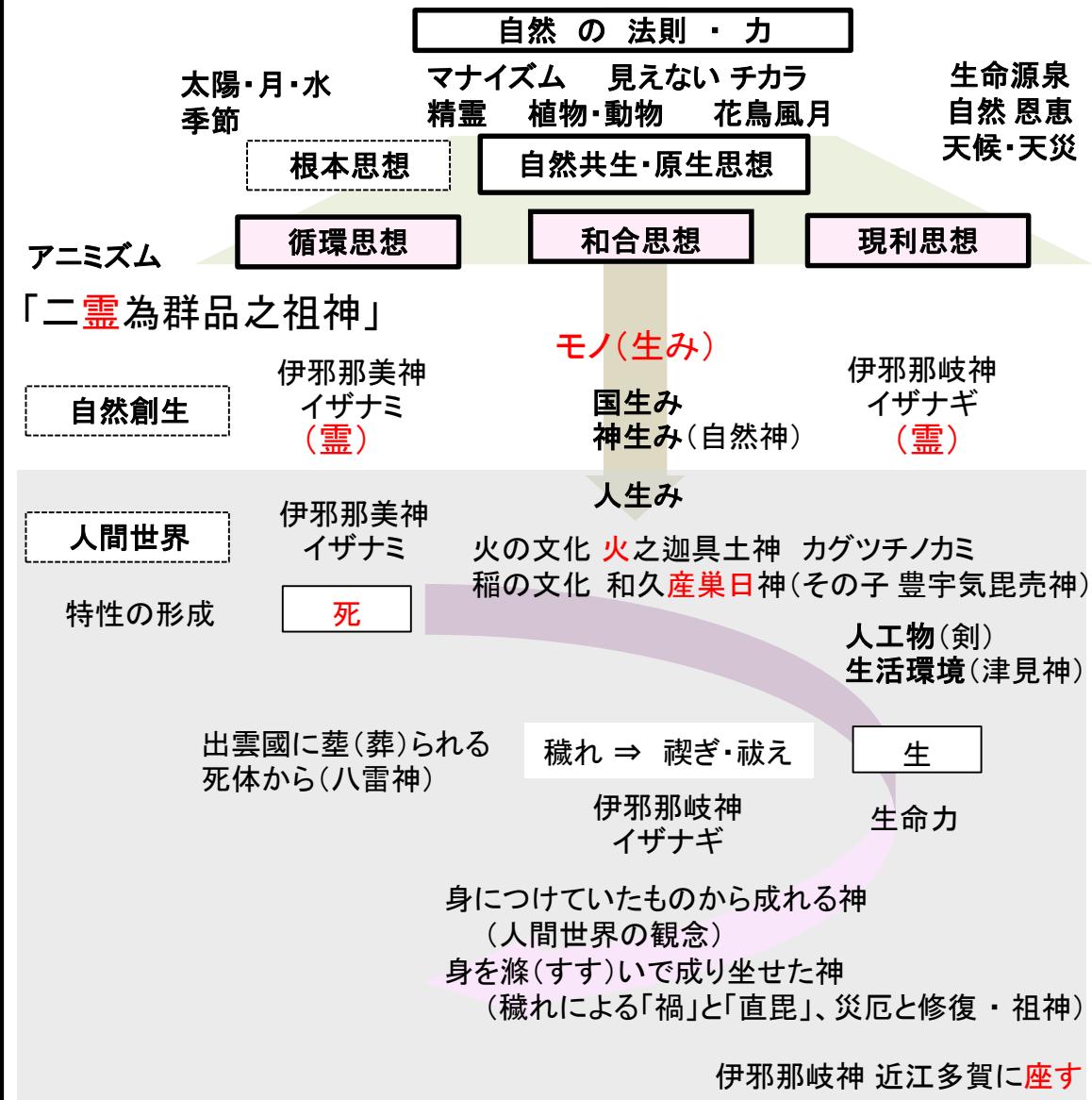
垂仁天皇

又天皇、以三宅連等之祖・名多遲摩毛理、遣常世國、令求登岐士玖能迦玖能木**實**。自登下八字以音。故、多遲摩毛理、遂到其國、採其木**實**、以縵八縵・矛八矛、將來之間、天皇既崩。爾多遲摩毛理、分縵四縵・矛四矛、獻于大后、以縵四縵・矛四矛、獻置天皇之御陵戸而、擊其木**實**、叫哭以白「常世國之登岐士玖能迦玖能木**實**、持參上侍。」遂叫哭死也。其登岐士玖能迦玖能木**實**者、是今橘者也。

記・紀神話の全体は、天上の神々の世界である高天原(たかまがはら)に淵源する皇室の神聖性と、皇室による国土と国民の支配の正統性を説明する目的で貫かれ、多様な話にもそれぞれに皇室の王権神話の一部としての意味と位置付けが与えられ、これが日本神話の一つの大きな特徴となっている。天地開闢(かいびやく)の後にまず活躍を語られるのは、**伊邪那岐神・命**と**伊邪那美神・命**で、原初には一面の海だった下界に、最初の陸地の淤能基呂嶋(おのごろじま)を作ってその上に降り、兄妹で結婚してまず日本の国土の島々を生み、次に多くの神々を生んだが、しまいには火の神を生んだために伊邪那美は、火傷を負って死んだ。伊邪那岐は、地下の死者の国の黄泉国まで妻を連れ戻しに行くが、失敗して地上に帰り禊(みそぎ)をすると、最後に左の目から**天照大御神**が、右の目から**月読命**が、鼻から**建速須佐之男**(すさのお)命が誕生し、**天照大御神**は高天原を、**月読命**は夜之食国を、**建速須佐之男**は海原を支配せよと、伊邪那岐から命令される。だが素戔嗚尊はこの命令を聞かずに泣き続け、怒った父に追放されると、天照大御神に会いに高天原に昇って行き、そこで邪心のないことを証明するために誓約(うけい)をし、姉神は弟神の十拳剣から三女神を、弟は姉が身に帯びていた珠から**天之忍穂耳**(あめのおしほみみ)命ら五男神を出生させる。**建速須佐之男**はそれから、高天原で乱暴を働き、天照大御神が怒って天石屋(あまのいわや)に閉じ籠る。太陽が隠れたため、世界が**常夜**(とこよ)になる。天神たちは相談して、皇室の神器となる八咫鏡(やたのかがみ)と八坂瓊(やさかに)の玉を作って袖に掛け、天宇受賣(あめのうずめ)命が踊りながら乳と陰部を露呈し神々を哄笑させるなど、賑やかな祭をし、天照大御神を天石窟から招き出した上で、**建速須佐之男**を下界に追放する。**建速須佐之男**は出雲で八岐大蛇(やまたのおろち)を退治し、その尾から出た草那芸剣(くさなぎのつるぎ)を天照大御神に献上し、生命を助けてやった櫛名田比賣(くしいなだひめ)と結婚する。その子孫の**大国主**(おおくにぬし)神が、**神産巢日神**の手の指の間から漏れ落ちて下界に来た不思議な小人の神の**少名毘古那**(すくなびこな)神と兄弟になり、協力して**国造り**をすると、天照大神が**天忍穂耳**命をその国に降らせ支配させようとして、大国主神のもとにつぎつぎに使者を派遣し、命令を伝えさせる。大国主神が最後に使者に来た**建御雷之男**(たけみかずち)神らの神威に屈し、ついに**国譲り**を承知すると、天照大神は**天忍穂耳**命の願いを聞き、この神の代りに誕生したばかりのその子どもで自分の孫の**邇邇藝命**(ににぎのみこと)に、三種の神器を授け、五伴緒(いつとものお)命らの天神たちを従わせ地上に降らせる。この天孫降臨の一行は、出迎えた猿田毘古(さるたひこ)神の案内で、日向の高千穂峯(たかちほのたけ)に降る。それから**邇邇藝命**と、その子で山幸彦の**火遠理命**(ほおりのみこと)、さらにその子で神武天皇の父となった**鸕草葺不合**(うがやふきあえず)命まで、三代の皇祖神は日向に住み、その物語である日向神話が記紀神話の終幕を構成し、このあと神武天皇の東征となる。

「**隠身**」ではない 神の世界

日本文化の原理



「**物實**」



モノに対するマナイズムの次に、生命の誕生と関係するカミ(神)、タマ(魂・霊)のアニミズムがある。「魂」と「霊」とは、霊にも御霊(みたま)の読みがあり、一般的にはその区別は定かではない。「魂」には主に神の作用として和魂・荒魂や天皇の鎮魂、魂振の用例がある。「霊」は、かつて「みずち/水霊」「のつち/野霊」「いかずち/雷」の「チ」、「わたつみ」「やまつみ」の「ミ」にも用いられ、神や自然の霊の意で、神秘的な力を表した。また、「霊」は祖霊、御霊(ごりょう)、怨霊など、神から人間などへ用例が拡大された。このことから、概ね、貴神崇敬性の「魂」、世俗汎用性の「霊」と区別できると考える。

元日本民俗学会会長の宮田登先生は「世界大百科事典」“神”の論述で、タマの顕著な特色は、それがつねに浮遊している霊であり、外来から何物かに付着し、またそこから去っていくという傾向をもっている、とする。(その点で**非人格的要素**として呪力・神秘力のマナが**モノ**からモノへと転移し得るマナイズムの要素が強い) タマは、**外来魂**といえる。たとえば稲のタマは**稲魂**とか**宇迦之御魂神**(記)倉稲魂(紀)と表現されている。稲魂が、稲穂や穀物に付着することにより豊穰がもたらされると考えられている。この稲魂が基礎となり、神話では保食神や登由宇気神(記)大気津比売神といった穀物神が成立する。

靈魂は、人間の身体に宿ると観念されている超自然的存在。靈魂に対する観念は、人間に限らず動物などの万物に霊が宿るとするアニミズムの観念に包含される。宗教の起源を論じたタイラーは、宗教のなかで最も簡単で原始的なものが「霊的存在」に対する信仰であると規定し、「霊的存在」には人間の身体に宿る靈魂、死霊、精霊という人間以外の霊や浮遊霊との三種類があり、靈魂や精霊の観念から神祇・神の観念に発展したと説いている。タイラーの説くアニミズム観念のうち、それが宗教の起源であるとする考えや進化論的な考え方に対しては各種の批判があり、また靈魂と精霊との区別も民族によって必ずしも一様でないことが明らかにされている。しかし靈魂や精霊に対する信仰は、原始や未開社会の宗教のみではなく、諸宗教においても重要な問題であり、靈魂・精霊などの遊離・憑依によって夢・幻覚・病気・予言、幸・不幸などを説明することも多く、靈魂や精霊を操作したり、排除や憑依させたりすることによって治病、託宣をする宗教的職能者の活躍が世界各地で認められる。

日本においては、靈魂を古代より**タマ**と呼び、魂・霊の漢字をあててきた。タマは人間の靈魂のみではなく、動植物などにも宿るものとされ、タマの遊離によって病気や死が説明されており、タマの遊離を防ぐ**鎮魂**(たましずめ)、それとは逆に体内で静止した靈魂を活動させようとする**魂振**(タマフリ)などの儀礼が古代より盛んに行われてきた。その意味では、日本人の靈魂観もアニミズムの概念に包摂できる。靈魂に限ってみても幾つかの区別がなされており、古代における**和魂**(にぎみたま)・**荒魂**(あらみたま)・**幸魂**(さきみたま)・**奇魂**(くしみたま)などの区別もその一つであるが、生者の遊離した靈魂を**生霊**(いきりょう)、死者の霊を**死霊**、子孫より祀られ非個人的な清らかな霊を**祖霊**とする区別も古からの一般的観念である。死霊は子孫からの祭祀を重ねられることにより祖霊となり、子孫を守護する存在となるものであるが、その一方で、非業の死をとげた者、この世に未練を残して死んだ者の霊は**御霊**(ごりょう)と呼ばれ、この世にさまざまな災厄をもたらすと信じられてきた。この**祖霊**と**御霊**という二つの観念が、日本人の靈魂観の基本をなしている。もっとも御霊という漢字をあててミタマと読み、天皇家の先祖霊を指す用法が『続日本紀』にみられる。しかし奈良時代末から平安時代にかけての頻発する政変・災害などを背景にして、非業の死をとげた者の怨霊が災厄をもたらすものとされ、貞観五年(八六三)、早良(さわら)親王以下の**怨霊**を鎮めるための御霊会が国家的レベルで執行された。また平安時代に災厄の要因とされたモノノケ(物怪)も、生霊・死霊・遊離霊などが主たる内容であったといえる。靈魂の処理は、**仏教**の普及によって次第に僧侶に委ねられるようになり、近世の寺請制度、寺檀関係の形成によって確立したものであるが、それでもなお、あるき巫女(みこ)・修験者・聖・行者などの下級宗教者の関与が認められ、とりわけ災厄の原因となる諸霊の処理に大きな役割を果たしてきた。

和魂と**荒魂** **奇魂** **幸魂** 古く日本人は神の靈魂の作用および徳用を異なる作用を持つ靈魂の複合によると考えた。すなわち、静止的な通常の状態における神霊の作用および徳用を(和魂)とし、活動的で勇猛、剛健、ある意味では常態をこえるような荒々しい状態における作用および徳用を(荒魂)と考えた。神霊も平常のときには一つの神格に統一され別個のはたらきは見せないが、時と場合に応じて分離し、単独に一個の神格としてはたらくものと信じられた。

古代的 感覚

自然の法則・力

見えないチカラ

他界(あちら ほか よそ むこう)

他界と現世

黄泉国 他界から来訪する霊的 彼方の(常世)国
死後 もしくは神の本質的存在 空・天 海・山

神への思い **魂** 和魂・荒魂 幸魂・奇魂

稀人概念 繋ぐモノ 風・鳥・柱

循環的概念(時間) 神籬社 現利的概念(場所)

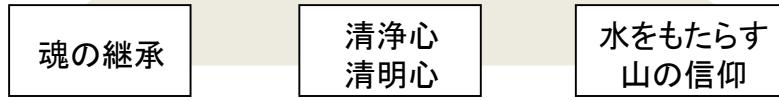
現世とあの世 神の依代 ことと海、山

現世(こちら ここ)

太陽・月・水 精霊 植物・動物 花鳥風月 生命源泉
季節 水と産霊(ムスヒ)の信仰 自然恩恵

穢れを落とし、水によって生命が誕生する

水の中の靈魂を体内に入れ、体と靈魂を結合する。



霊(ヒ)の存在 原初共同体 モラル 自然への恩恵・畏怖
清浄な水に宿る 地域生活・祭祀 樹木・狩猟の地
雷・災害の地

アニミズム 八百万信仰

ニギと**アラ**は対語で、(和妙(にぎたえ))<(荒妙(あらたえ))>(《延喜式》)、(毛麤物(けのあらもの))<(毛和物(けのにぎもの))>(《古事記》)などの用例がある。《古事記》《日本書紀》には、崇神天皇のとき、疫病のために多くの民が死んだのは大物主神のたたりであると見え、それは(荒魂)のたたりであると説かれる。

和魂だけをまつる場合も、荒魂だけをまつる場合もある。《日本書紀》では、神功(じんぐう)皇后の(三韓征伐)に際して、(住吉三神の和魂は王身(みついで)に従って寿命(みののち)を守り、荒魂は先鋒(さき)となって師船(みいくさのふね)を導き守ろうとした)とあり、長門住吉神社には住吉三神の荒魂がまつられている(住吉大社の三神は和魂もしくは荒魂、両説がある)。ほかに荒魂をまつっている例としては、伊勢の皇大神宮(内宮)の別宮荒祭宮(あらまつりのみや)には天照大神の荒魂が、豊受大神宮(外宮)の別宮多賀宮(たがのみや)には豊受大神の荒魂がそれぞれまつられている。なお、神の靈魂の作用および徳用を言い表したのものには、ほかにも(奇魂(くしみたま))<(幸魂(さきみたま))>などがある。奇魂とはすべてのことを知りわきまえしむる魂で、幸魂とは幸いをもたらす恵みの魂で、ともに和魂から分化したものと考えられる。この幸魂・奇魂の語は、『日本書紀』神代宝剣出現章第六の一書で、大己貴神のそのはたらきを示すことで記し、『日本紀私記』で幸魂は「是左支久阿良之无留(さきくあらしむる)魂也」と註しているように、人を幸福にさせる神の靈魂で、奇魂は不思議な力を持った神の靈魂の意。

日本の原始的信仰宗教としてアニミズムとする見解が、ごく一般的だが、実は、マナイズムを想定しないと説明できないことがある。

アニミズムとは、宗教の起源を論じたイギリスの人類学者タイラーが提唱した原始宗教の生命万物の「霊」観念である。その後マレットは、コドリントンがポリネシア信仰で紹介した超自然的・神秘的で非人格的な力への信仰に注目し、アニミズムの前段階の観念としてマナ、マナイズムを定義した。**マナイズム**は**靈魂の存在を前提とせず、超自然的な力そのものが**物体**その他に宿ると信じる**。自然物、自然現象に対する尊敬や畏怖(いふ)の態度の総称である。原始宗教の超自然観は二つに大別される。(一)超自然的存在・対象に人格的要素を認めるものと、(二)これに多少とも非人格的要素を認めるものとである。

人格的要素の基本的なものは、靈的存在(スピリチュアル=ビーイングズ)=靈魂(ソウル)・死靈(ゴースト)・精靈(スピリット)である。一般に靈魂は人間の身体に宿る靈的存在、死靈は死者の靈的存在、精靈は人間以外の諸存在に宿る靈的存在、すなわち神靈・祖靈・靈鬼・妖精など、とされる。しかしどの原始社会においても超自然的存在がこのように明瞭に区分されているわけではない。実際には一つの語によって複数の、あるいはすべての靈的存在を意味していることが少なくない。靈的存在の特徴は、その宿り場を自由に離脱し、人間・社会の吉凶禍福に直接間接に影響を与えると信じられている点にある。

非人格的要素は一般に呪力・神秘力として把握されていることが多い。メラネシアやポリネシアにおける「マナmana」観念はその典型的なものである。マナは神や人間から動植物・自然現象・自然物・人工物に宿り、**モノ**からモノへと転移し得る。しかし一切の存在が無差別にマナを有しているとは見なされない。人間も他の存在も並みはずれた力能を示すとき、マナを有するとされるのである。

学説的には超自然的存在・対象に人格的要素を認めるもの、すなわち人格的超自然観をアニミズムと呼び、これに対して非人格的超自然観をマナイズム・アニマティズム・プレ=アニミズムなどと呼ぶ。

死靈・祖靈崇拜、シャーマニズム、ナチュリズム(自然崇拜)、高神・多神崇拜、フェティシズム(呪物崇拜)、トーテミズム、ウィッチクラフト(妖術)、ソーサリー(邪術)などの原始的諸宗教形態は、いずれも前述の二つの超自然観を基盤として成立している。日本大百科全書「自然崇拜」などより

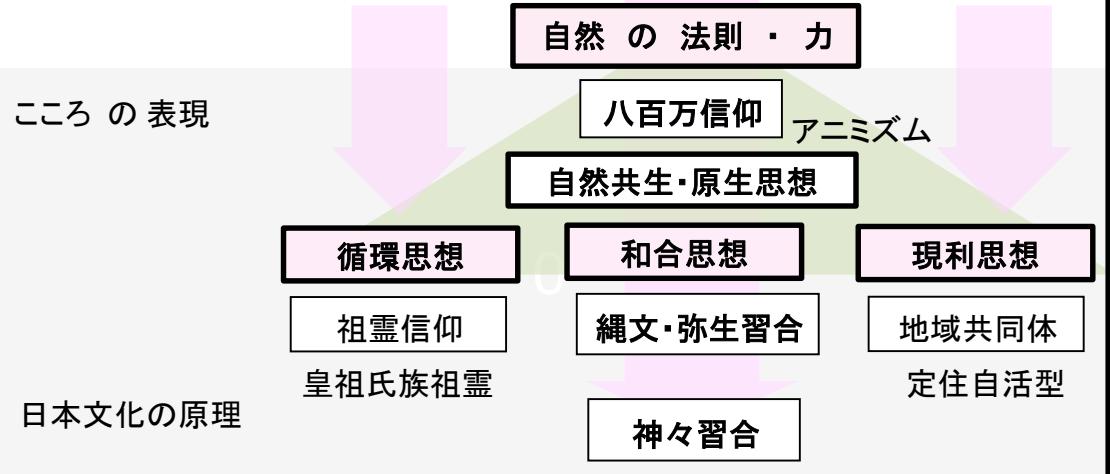
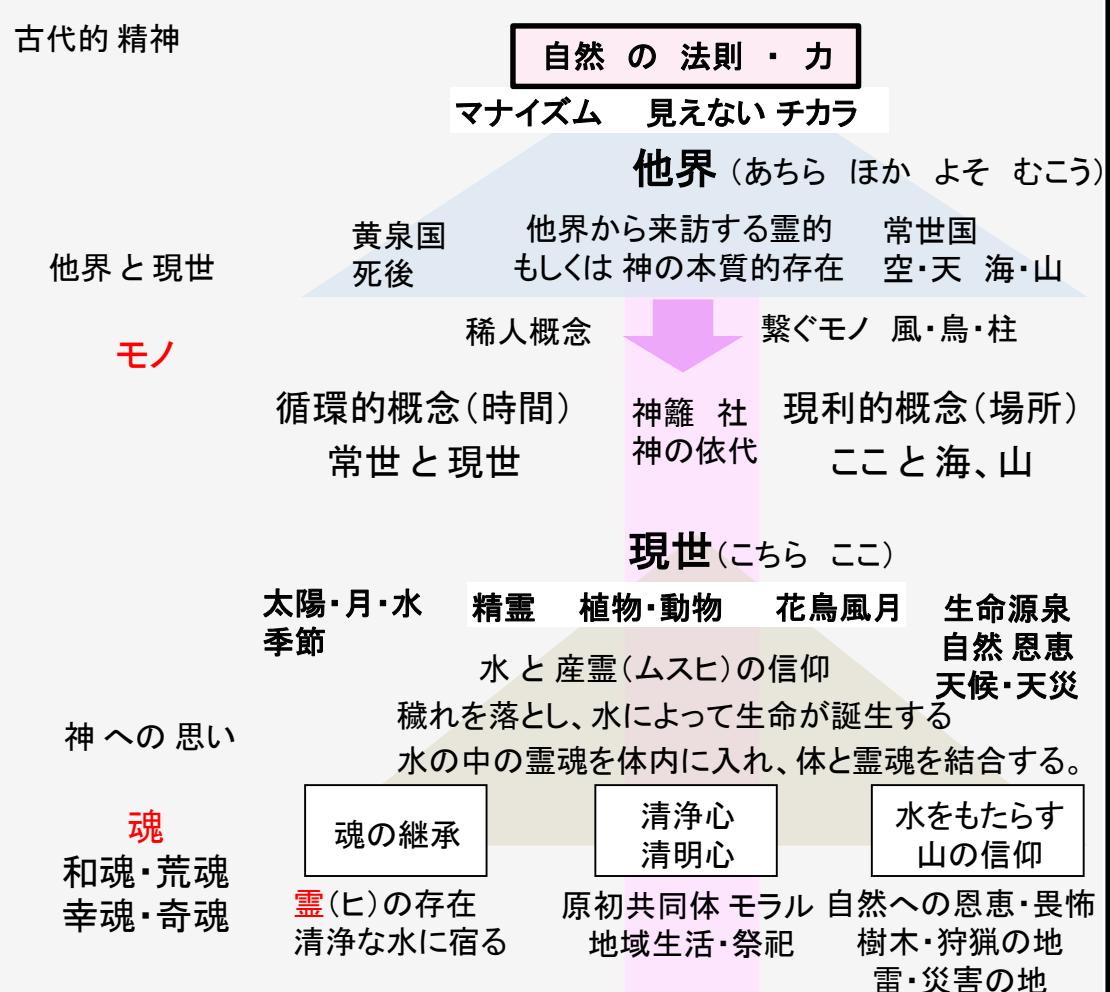
古事記では、初めに誕生する、「天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)」「高御産巢日神(タカミムスヒノカミ)」「神産巢日神(カミムスヒノカミ)」「宇摩志阿斯訶備比古遲神(ウマアシカビヒコチノカミ)」「天之常立神(アメノトコタチノカミ)」「國之常立神(クニノトコタチノカミ)」「豊雲上野神(トヨクモノカミ)」は、「**隠身**」なりとする。一方そのあとに生まれる伊邪那岐命(イザナギ)・伊邪那美命(イザナミ)については、その序文で「**二靈**為群品之祖神」と記す。つまり万物の生みの親として神名に「**靈**」の文字が使われている。前述のいわゆる造化三神の「**隠身**」は、彼らの神名が「**靈**」を保持せず、万物生命の誕生とは直接に関係が無い。そして**非人格的**な「**見えないモノ、チカラ**」として記されていることに注目しなければならない。

「高御産巢日神」と「神産巢日神」は、**産巢日(ムスヒ)**神として超自然的な力を保持するが、あえて神名に「**靈**」を持ちないマナとして表現されている。中西進先生は著書『こころの日本文化史』の中で、「マナ」から日本語としての「**モノ**」への母音交替を指摘、縄文土器に超越的な力の表現をみる。そして「大物主大神」のモノであり、モノが依りついた三輪山の神である、とされる。その著書では触れてはいないが、既に古事記神代記に「物」は登場し、萌え上がった物から神が誕生したと、**力としてのモノ**を表現している。

古事記上巻(序) 臣安萬侶言。夫、混元既凝、氣象未効、無名無爲、誰知其形。然、乾坤初分、參神作造化之首、陰陽斯開、**二靈**爲群品之祖。(後略)

(神代記) 天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神訓高下天、云阿麻。下效此、次高御産巢日神、次神産巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、**隠身**也。次、國稚如浮脂而久羅下那州多陀用幣流之時流字以上十字以音、如葦牙、因萌騰之**物**而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神此神名以音、次天之常立神。訓常云登許、訓立云多知。此二柱神亦、獨神成坐而、**隠身**也。(後略)

但し「高御産巢日神」「神産巢日神」は、日本書紀では、その一書で「高**皇**産**靈**尊」「神**皇**産**靈**尊」とされる。これは対外的書物の性格上、のち皇祖神となる大**日**靈貴(おおひるめのむちのかみ)(一書云、天照大神)を日の唯一神格とするためである。すなわち太陽の持つ生成(ムス)力の意図的な分離として、「日」から「**靈**」とし、逆に「**皇**」は、特に登場する高皇産靈尊において、天皇との関係を強調するものである。



「産巢日」ムスヒは、天照大神以前の**太陽神**の神格を表現している。なぜなら古事記の中で、天照大神が生まれる前の物語で、すでに光がある見える世界が描かれている。「**靈**」の部首「**雨**」は太陽と同じく「**天**」と関係するが、今日「**靈**」は「**ヒ**」と読まない。やはりその神名は、古事記用例の「**日**」が原語・原意である。超自然的な力、マナイズムとしての**太陽神**、太陽光の**自然力**への信仰である。

ちなみに「**物の怪**」のモノは広義にはマナに近い自然的または超自然的な靈のことで、この正体不明の靈的存在が人に憑依して病気にしたり命を奪ったりすると考えられる現象を「物の怪」という。物の怪は平安時代の文献に頻出し、邪悪な靈の発現をいうことが多い。その正体はたいてい嫉妬や怨恨をもった生靈や死靈であり、のち鬼の形でイメージされた。「世界大百科事典」

平安京の都市構想に、中国の「四神相応」理念があったことは、よく知られている。現国際日本文化研究センター所長の小松和彦先生と、写真家の内藤正敏先生との対談による著書『鬼がつくった国・日本』の中で、そのことを「陰陽道の呪術によるほどこし」とする。しかし、平安京の創始以前に遡ると、その外縁たる山々に観音菩薩が祀られたことは、今では遠い記憶となっている。著書の中でも語られている「まつろわぬ者」としての象徴、役行者(役小角)から始まる修験者たちによってそれは祀られた。そののち、観音信仰は、我が国仏教の一つの柱として「現世利益」の代表となってゆく。

ではなぜ、彼らは山に**観音菩薩**を祀ったのか？ その手掛かりは、上賀茂神社や、松尾大社、伏見稻荷大社にある。それら神社の原初たる信仰は、背後の山頂の「磐座」を依り代とする、いわゆる**山**の神、神山信仰である。「神聖なる山々に立ち入り、呪的な力を獲得しようとした者たちが修験者であった」(同著P77)

山がもたらす**水**は、観音菩薩の典拠『法華経』で、平等な慈悲の比喩(薬草喩品第五)として語られ、特に日本において、長谷寺の本尊を代表に「水瓶」を持つ観音菩薩が多い。もちろん、水は生活に欠かせない命の源泉である。「磐座」への信仰は、古事記のスサノオやオオクニヌシに象徴される「出雲文化」として、「銅鐸」の出土と同様に、現在の島根、出雲から和歌山、熊野にわたる広域に、その存在を確認できる。そして彼らは、アマテラスたち天孫の立場からは、まさに「まつろわぬ者」であり「国譲」で封印され、崇神天皇を経て習合したと、古事記も語る。前述の役行者(役小角)は、大和の高鴨神社地域を出自とするその出雲の鴨族であり、山を媒介に復活したのであった。

上記「陰陽道」の安倍清明もまた、衰退した古代豪族の末裔である。大化改新の時代の阿倍内(倉梯)麻呂や、奈良時代の阿倍仲麻呂を最期に、藤原氏の陰となっていた。いわば「**闇**」にいた一族の者が、平安時代に陰陽師として同じく復活した。平安京創建当時の御霊信仰、菅原道真死後の怨霊信仰は、安倍清明活躍の前提であった。それら潮流は、「闇」がもたらした「闇」からの復活と言える。ここでいう、これらの「鬼」の痕跡は、一見、隠れている。しかし、よく見ると確かに実在する。その古層たる痕跡を見ようとしないと日本の歴史も見えてこない。日本文化の源流も現代の「闇」もまた、隠れている。

『鬼がつくった国・日本』で、「鬼」とは、説話などで語られる「想像上の鬼」、もしくは周囲や自分自身がその子孫と信じていた「実在の鬼」で、反体制的で村落共同体の外にいる人々のこととする。(同著P11)

同著は、特に後者の「**実在の鬼**」について語られている。その「鬼」たちは、中央から排除された者としての意識で、またある時は、天皇と結びついた起源伝承を持つ意識、その**二面性**をアイデンティティとする。「鬼」は、山、海、谷、坂でネットワークし、京都周辺においては紀州熊野を拠点とし、時に体制側の後白河法皇たちと結びつく、とする。(同著P176)

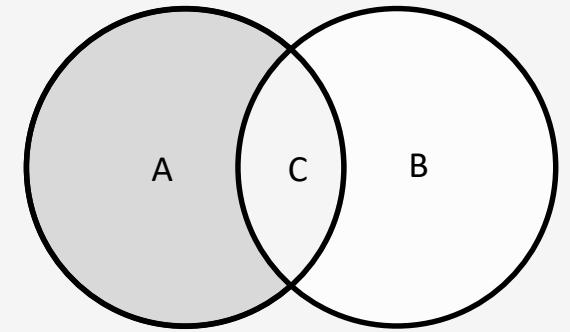
小松先生の著書『異世と日本人』は、さきほどの前者、「**想像上の鬼**」について語られている。人々の恐怖の対象が、**自然**・道具・人間・自分自身へと、意識する対象が狭窄、縮小しつつ、そのころに出現した「鬼」、「妖怪」とする。そして、多くの異界をめぐる物語の舞台が、「妖怪や霊的存在の世界」としての「異界」と「人間界」の双方に**重なる**「両義性を帯びた領域」である、とする。(祀り上げている霊的存在が「神」で、そうではなく人間の制御外に在る霊的存在が「妖怪」)。また、同センター名誉教授の久野昭先生の著書『日本人の他界観』では、**死後**の意味としての「他界」は、ほとんど現世と隣り合わせといってもいいくらい意外に**親しい**世界、とする。そして、その理由を日本という精神風土に長く続いてきた他界とのかかわり、とする。

つまり、我が国で、「闇」「異界」、そして「他界」は、「実在」「想像」を問わず、「人間界」(この世)と明確に断絶した世界ではない。その世界の「実在」や「想像」の「鬼」や「神」、「妖怪」、さらに「死後の世界」は、「日常」に対し、ある部分で重層した「非日常」的な意識の世界に存在したと言える。その非断絶・重層の理由は何であろうか？ 当論は、それを**自然環境**と考える。なぜなら、小松先生の「想像上の鬼」つまり、人々の恐怖の対象が「自然」から始まり、また、久野先生のいう「日本という精神風土」は、自然世界の盛衰・生死が身近である風土がもたらした、「無常感」をもつ精神を示す、と考えるからである。非断絶・重層の理由について、当論では、別途、マニイズムの「モノ」とアニミズムの「霊」が、それぞれの**見えないもの、存在****という共通性**を媒介に、同一視されていくところにあるのではないかと仮説したが、まさに自然環境がもたらした観念である。マニイズムとは、**自然物、自然現象**に対する尊敬や畏怖の態度の総称であり、これはまた、まさに現代的な課題でもある。小松先生は、鬼や妖怪の棲む「闇」や「異界」は、人間に対して「**道徳**」の役割を持ち、人間社会の矛盾や自身の不正、罪悪感からくる恐怖心の現れとする。そして、現代は、「空間」や「時間」に画一的に「**光**」があり、その「見える(あるいは、見えると思ひこんでいる)時代」に、見えない「闇」や「異界」の意義を指摘される。

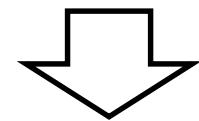
本論は、日本文化の理解のため、「日本人のころ」を構造化するものである。くしくも当論でも、自然の「見えないチカラ」に注目し、「他界」を広義的に「空間」「時間」の両意でとらえ、そして「この世」との関係を示すところから始まる。日常では見えない、歴史の中で培われた「日本のころ」を、因果関係によって構造化することが、本論の目的である。

小松和彦先生 著書『異世と日本人』より

「異界をめぐる概念図」



- A : 「妖怪の世界・霊的存在の世界」としての「異界」
- B : われわれの世界「人間界」
- C : 双方に**重なる**「両義性を帯びた領域」



「日本文化の構造」との関係		発展的普遍化
A	C	B
「異界」闇意識	境界	「人間界」光意識
非日常	習合性	日常
妖怪や霊的存在の世界	自然の法則・力	
死後の世界	マニイズム 見えないチカラ	
	八百万信仰	
	自然共生・原生思想	
循環思想	和合思想	現利思想
非日常 ハレ	重層	日常 ケ
禊ぎ・祓え	習合	实用・効率
魂振・鎮魂	均衡	作法・型
来世・供養	葛藤	精緻 写実 極地
転生・無常	合議	わざやまところ

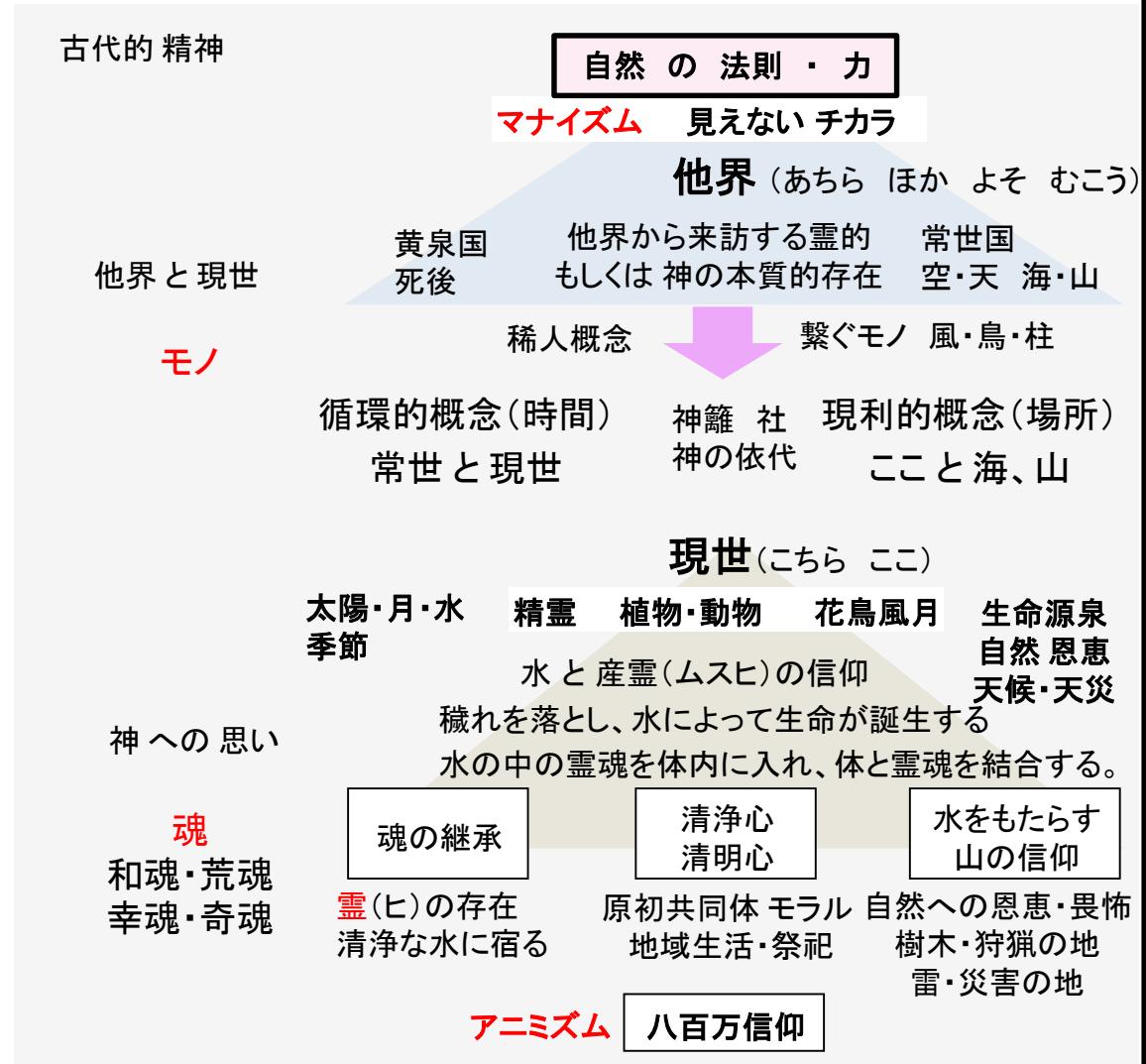
モノに対するマナイズムの次に、生命の誕生と関係するカミ(神)、タマ(魂・霊)のアニミズムがある。「魂」と「霊」とは、霊にも御霊(みたま)の読みがあり、一般的にはその区別は定かではない。「魂」には主に神の作用として和魂・荒魂や天皇の鎮魂、魂振の用例がある。「霊」は、かつて「みずち/水霊」「のつち/野霊」「いかずち/雷」の「チ」、「わたつみ」「やまつみ」の「ミ」にも用いられ、神や自然の霊の意で、神秘的な力を表した。また、「霊」は祖霊、御霊(ごりょう)、怨霊など、神から人間などへ用例が拡大された。このことから、概ね、貴神津崇敬性の「魂」、世俗汎用性の「霊」と区別できると考える。

タマの顕著な特色は、それがつねに浮遊している霊であり、外来から何物かに付着して、またそこから去っていくという傾向をもっていることである。したがってタマは、外来魂といえる。たとえば稲のタマは**稲魂**とか**宇迦之御魂神**(記)倉稲魂(紀)(うかのみたま)と表現されている。稲魂が、稲穂や穀物に付着することにより、豊穰がもたらされると考えられている。この稲魂が基礎となって、神話では、保食神(うけもちのかみ)とか登由宇気神(記)(とゆうけのかみ)、大気津比売神(おおげつひめのかみ)といった穀物神が成立する。世界大百科事典「神」

靈魂は、人間の身体に宿ると観念されている超自然的存在。靈魂に対する観念は、人間に限らず動植物などの万物に霊が宿るとするアニミズムの観念に包含される。宗教の起源を論じたタイラーは、宗教のなかで最も簡単で原始的なものが「霊的存在」に対する信仰であると規定し、「霊的存在」には人間の身体に宿る靈魂、死霊、精霊という人間以外の霊や浮遊霊との三種類があり、靈魂や精霊の観念から神祇・神の観念に発展したと説いている。タイラーの説くアニミズム観念のうち、それが宗教の起源であるとする考えや進化論的な考え方に対しては各種の批判があり、また靈魂と精霊との区別も民族によって必ずしも一様でないことが明らかにされている。しかし靈魂や精霊に対する信仰は、原始や未開社会の宗教のみではなく、諸宗教においても重要な問題であり、靈魂・精霊などの遊離・憑依によって夢・幻覚・病気・予言、幸・不幸などを説明することも多く、靈魂や精霊を操作したり、排除や憑依させたりすることによって治病、託宣をする宗教的職能者の活躍が世界各地で認められる。

日本においては、靈魂を古代より**タマ**と呼び、魂・霊の漢字をあててきた。タマは人間の靈魂のみではなく、動植物などにも宿るものとされ、タマの遊離によって病気や死が説明されており、タマの遊離を防ぐ**鎮魂**(たましずめ)、それとは逆に体内で静止した靈魂を活動させようとする**魂振**(タマフリ)などの儀礼が古代より盛んに行われてきた。その意味では、日本人の靈魂観もアニミズムの概念に包摂できる。靈魂に限ってみても幾つかの区別がなされており、古代における**和魂**(にぎみたま)・**荒魂**(あらみたま)・**幸魂**(さきみたま)・**奇魂**(くしみたま)などの区別もその一つであるが、生者の遊離した靈魂を**生霊**(いきりょう)、死者の霊を**死霊**、子孫より祀られ非個人的な清らかな霊を**祖霊**とする区別も古くからの一般的観念である。死霊は子孫からの祭祀を重ねられることにより祖霊となり、子孫を守護する存在となるものであるが、その一方で、非業の死をとげた者、この世に未練を残して死んだ者の霊は**御霊**(ごりょう)と呼ばれ、この世にさまざまな災厄をもたらすと信じられてきた。この祖霊と御霊という二つの観念が、日本人の靈魂観の基本をなしている。もっとも御霊という漢字をあててミタマと読み、天皇家の先祖霊を指す用法が『続日本紀』にみられる。しかし奈良時代末から平安時代にかけての頻発する政変・災害などを背景にして、非業の死をとげた者の怨霊が災厄をもたらすものとされ、貞観五年(八六三)、早良(さわら)親王以下の怨霊を鎮めるための御霊会が国家的レベルで執行された。また平安時代に災厄の要因とされたモノノケ(**物怪**)も、生霊・死霊・遊離霊などが主たる内容であったといえる。靈魂の処理は、**仏教**の普及によって次第に僧侶に委ねられるようになり、近世の寺請制度、寺檀関係の形成によって確立したものであるが、それでもなお、あるき巫女(みこ)・修験者・聖・行者などの下級宗教者の関与が認められ、とりわけ災厄の原因となる諸霊の処理に大きな役割を果たしてきた。【靈魂】国史大辞典

和魂と**荒魂** **奇魂** **幸魂** 古く日本人は神の靈魂の作用および徳用を異なる作用を持つ靈魂の複合によると考えた。すなわち、静止的な通常の状態における神霊の作用および徳用を(和魂)とし、活動的で勇猛、剛健、ある意味では常態をこえるような荒々しい状態における作用および徳用を(荒魂)と考えた。神霊も平常のときには一つの神格に統一され別個のはたらきは見せないが、時と場合に応じて分離し、単独に一個の神格としてはたらくものと信じられた。



ニギと**アラ**は対語で、〈和妙(にぎたえ)〉〈荒妙(あらたえ)〉(《延喜式》)、〈毛麤物(けのあらもの)〉〈毛和物(けのにぎもの)〉(《古事記》)などの用例がある。《古事記》《日本書紀》には、崇神天皇のとき、疫病のために多くの民が死んだのは大物主神のたたりであると見え、それは〈荒魂〉のたたりであると説かれている。和魂だけをまつる場合も、荒魂だけをまつる場合もある。《日本書紀》では、神功(じんぐう)皇后の〈三韓征伐〉に際して、〈住吉三神の和魂は王身(みついで)に従って寿命(みいのち)を守り、荒魂は先鋒(さき)となって師船(みいくさのふね)を導き守ろうとした〉とあり、長門住吉神社には住吉三神の荒魂がまつられている(住吉大社の三神は和魂もしくは荒魂、両説がある)。ほかに荒魂をまつっている例としては、伊勢の皇大神宮(内宮)の別宮荒祭宮(あらまつりのみや)には天照大神の荒魂が、豊受大神宮(外宮)の別宮多賀宮(たがのみや)には豊受大神の荒魂がそれぞれまつられている。なお、神の靈魂の作用および徳用を言い表したのものには、ほかにも〈奇魂(くしみたま)〉〈幸魂(さきみたま)〉などがある。奇魂とはすべてのことを知りわきまえしむる魂で、幸魂とは幸いをもたらす恵みの魂で、ともに和魂から分化したものと考えられる。この幸魂・奇魂の語は、『日本書紀』神代宝剣出現章第六の一書で、大己貴神のそのはたらきを示すことで記し、『日本紀私記』で幸魂は「是左支久阿良之无留(さきくあらしむる)魂也」と註しているように、人を幸福にさせる神の靈魂で、奇魂は不思議な力を持った神の靈魂の意。

「産霊(むすび)」から「水を掬ぶ(むすぶ)」「結ぶ」へ

この言葉は、天皇の皇祖霊信仰、穀物の起源を語り、また仏教では先祖供養などを誕生させた。我が国の「生命誕生・魂の継承」の思想、「結ぶ」の源流を辿る。

「結び」の語源である『産巢日・産霊(むすひ)』は、日本の神信仰における重要な概念である。「産(むす)」は生じる、「霊(ひ)」は神秘的、霊的な働きを示す。つまり『ムスビ』とは天地万物を生み出す霊的な働きのことを言う。

古代から続いてきた日本の信仰心である「森羅万象に神が宿る」という考え方の根幹をなす。もうひとつ、むすびには『水を掬ぶ(むすぶ)』という意味がある。水を両手のひらで掬って(すくって)飲む動作を『水を掬ぶ(むすぶ)』と言う。日本の古代信仰では水の中に霊魂を入れてそれを人間の体の中に入れることで、体と霊魂を結合させるという意味があった。その動作をした者は非常な威力を発揮して来る。この技法を「禊」とした。そして、この水の「掬ひ」と、何かを結んだり結合する意の「結び」には、深いつながりがある。内在するものを外部に逸脱しないようにした外的な形を「むすび」という言葉で表現した。水の掬ひの信仰は今ではもう廃れたが、このような動作を今日「結ぶ」と言うようになったのです。(折口信夫『産霊の信仰』より抜粋、要約)

① 宮中八神 と「産霊(むすび)」

宮中で祀られていた宮中八神 八神殿(はっしんでん)は、日本の律令制下で古代から中世の間に神祇官西院に設けられた、天皇守護の8神を祀る神殿である。大同2年(807年)編纂『古語拾遺』と延長5年(927年)『延喜式』神名帳とで表記は異なるが、同じ神を指す。うち5神に「ムスビ(ムスビ)」が含まれている。神産日神(カミムスビ)と高御産日神(タカミムスビ)と以下、産霊に

関係する三柱と、その以外の三柱である。玉積産日神は『古語拾遺』の「魂留産霊」と同神で、「タマツメ(タマトメ)」は魂を体に留める(鎮魂)という意味である。生産日神の「イク」は「イキ」(生き、息)と同根で、むすひの働きを賛える語である。足産日神の「タル」は、その働きが満ち溢れている(足りている)様子を示す。

大宮売神は、宮殿の人格化とも内侍(女官)の神格化ともいわれ、君臣の上下を取り持つ神。御食津神は、食物を司る神、事代主神は、言葉を司る神とされる(出雲系の事代主神とは異なるとされる)。

祭神8神は天皇に直接関わる重要な神々であるが、そのうちに皇祖神であるアマテラス(天照大御神)が含まれていない。

② 「高御産巢日神」について

『古事記』では誕生や葦原中国の平定の命令神としての多くの記述がある。「日本書紀」巻第二 神代下では「皇祖」とされ、出雲国造「神賀詞」では「高天の神王」(たかあまのかみおや)とされる。そのことから、原初の最高神はタカミムスビ(高御産日神/高皇産霊尊)であったとする説がある。「日本書紀」で、アマテラスは第10代崇神天皇の時に宮廷外に出された(のち伊勢神宮)と記され、7世紀末頃にタカミムスビは宮中に、アマテラスは伊勢に住み分けたとする説もある。崇神天皇以前の皇祖として、アマテラスと神武天皇を設定したのは天武天皇だろう。

③ カグツチの別名 「ホムスビ」(火産霊)

火の神。火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ; 迦具土神)、火之夜藝速男神(ひのやぎはやをのかみ)、火之炫毘古神(ひのかがびこのかみ)と表記。『日本書紀』では、軻遇突智(かぐつち)、火産霊(ほむすひ)と表記される。イザナミは火の神カグツチを生んだことで陰部を火傷して亡くなった。それを怒ったイザナギはカグツチを斬り殺すが、その際に「山神八柱」や、「建御雷之神など雷火神や剣神ら八柱」が化生している。多数の神を生み出す神ということで「むすひ」の神なのであるが、ここから「むすひ」の、死んでもなお多くの命を生み出すという、生命の連続性の象徴という意味が見えてくる。「連続」とはすなわち「結び」(むすび)である。

和久産巢日神、ワクムスビもその時に誕生し、死んでから多数の穀物などを生み出している。日本書紀』では稚産霊と表記される。神名の「ワク」は若々しい、「ムスビ」は生成の意味であり、穀物の生育を司る神である。食物神のトヨウケヒメ(豊受比売神)を生み、『日本書紀』ではその体から蚕と五穀が生じている。他の食物神の大気都比売(オオゲツヒメ)・保食神(ウケモチ日本書紀)などと同様に、稲荷神(倉稲魂命)(うかのみたま)と習合し、同一視されるようになった。オオゲツヒメは、神産みにおいてイザナギとイザナミの間に生まれたとの記述がある。高天原を追放されたスサノオは、鼻や口、尻から食材を取り出し、それを調理していたオオゲツヒメを、汚い物を食べさせていたのかと斬り殺した。、その死体、頭から蚕、目から稲、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が生まれた。

④ 熊野速玉大社：熊野速玉大神 熊野夫須美大神(むすび産霊神) 熊野本宮大社：家都美御子大神(食物神)

(参考) 忌部氏である齋部広成、大同2年(807年)編纂の『古語拾遺』によると、初代神武天皇の時に皇天二祖(天照大神・高皇産霊神)の詔のままに神籬を建て、高皇産霊・神皇産霊・魂留産霊・生産霊・足産霊・大宮売神・事代主神・御膳神を奉斎したといい、編纂当時の祭祀はこれに始まるという。

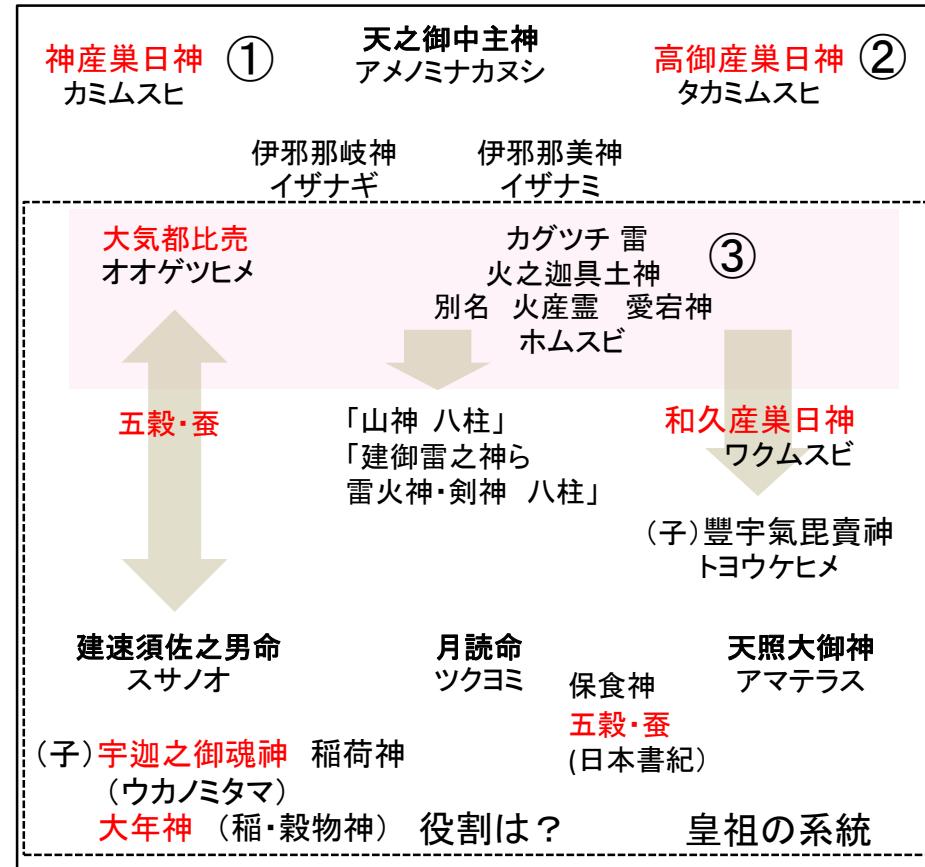
△カムロギ・カムロミと産霊神 始源神の天之御中主が親で、高御産巢日が長男、津速産霊(ツハヤムスビ)が次男、神産巢日を三男とする。

△氏族と産霊 高皇産霊神は伴・佐伯の祖、津速産霊神は中臣朝臣の祖、神皇産霊神は紀直の祖。

総角結び agemaki musubi
無防備な背後を守り、生命の緒をつなぎとめる護符としてつけられている。この総角結びは中央の結び目の形から「入型」と「人形」に分けられます。
日本武具には「人形」を使い、部屋や調度品の装飾には入型が使われる。



古事記 「産霊 神々の位置付け」



ハレ・ケ 穢 禊・祓 タマ・モノ 殯(モガリ) 鎮魂 魂振 (招魂 みたまふり)



「**神産巢日神**」について 古事記の中には、古代生活における「循環」信仰、思想 も描かれている。黄泉の国(死者の国)を訪問した伊邪那岐命(いざなぎのみこと)が死の**穢れ**に触れ**禊祓**をした際に、**悪霊はらいや、時、病気治療、道案内、食料、航海、漁労など十二の神が誕生した**という記述。そして、目耳鼻口陰尻から食物を出した大氣津比賣神を、須佐之男命(すさのお)が**穢れ**として殺した時に、神産巢日御祖命がそれら食物を 種とした記述がある。つまり、「ハレ」は清浄性・神聖性、「ケ」は日常性・世俗性、そして「**ケガレ**」は不浄性だが、ケガレは稲の霊力であるケが枯れた状態、つまり「**ケ枯れ＝ケガレ**」であり、そのケガレを回復するのがハレの神祭り、その結果、生活に必要な活力が**誕生、再生**されるといった 循環の信仰、思想である。

「**ハレ**」と「**ケ**」は、日本人の生活リズムを表現した言葉で、漢字で書く場合ハレには「晴」、ケには「褻」の字が当てられている。民俗学者・柳田國男(明治8年～昭和37年)によって注目され、かつての日本人の生活にはハレとケの二つの時期があり、両者ははっきりと区別されていた、と主張。「ハレ」とは、神社の祭礼や寺院の法会、正月・節句・お盆といった年中行事、初宮参り・七五三・冠婚葬祭といった人生儀礼など、非日常的な行事が行われる時間や空間を指した。そしてハレ以外の**日常生活**(普段の労働や休息の時間・空間)が「**ケ**」であるとして、このハレとケとの**循環**リズムから日本の生活文化が分析できると唱えた。

非日常である「ハレ」の日は、単調な生活に変化とケジメをつける日であり、この日には人々の衣食住に大きな変化が表れ、例えば特別な日にのみ着用される「晴れ着」を着たり、家や部屋には普段とは違う装飾を施したり、酒・米・魚・餅・団子・赤飯・肉・寿司といった日常生活では口にしない食物が供せられるなど、非日常的な世界が設定された。ハレの場における酒は、味を楽しむより、酔う事によって共同体を構成する人々が連帯感を深める事が目的であったとされる。今日使われる「晴れ着」「晴れ姿」「晴れ舞台」などの言葉は、いずれもハレの概念に基くものである。一方、ケとは、日常生活そのものを指し、普段着を意味する「褻着」(けぎ)や日常食を意味する「褻稲」(けしね)などの民俗語彙から抽出された概念といわれる。柳田は、このハレとケの循環の中に稲作を基礎とする民族生活があった事を指摘、江戸時代後半以降は飲酒、魚食や肉食が日常化し、人々の服装も色鮮やかになっていくなど、ハレの日常化が進み、近代化と共にその両者の区別が曖昧になってきている事を指摘した。

古代の「死生観」において、「**ケガレ**」る魂「**タマ**」は生霊であり、生霊が抜けた肉体が行く世界が「**モノ**」である。縄文時代には屍を村外に遠ざけたことから、「ケガレ」の意識が強く表れている。弥生時代には、土器など死者への副葬品が後期にかけて増加する。そして、この副葬品は、古事記の葬儀に登場する「殯」に用いられたと考えられている。

「**殯**」とは、死の直後「**タマ**」はすぐには「**モノ**」の世界に行かず滞留すると考えられ、「**鎮魂**」の歌舞、辞で「**魂振**」れをして屍に呼び戻し、死者と生者の「**タマ**」を結合する儀式である。「魂振」の意義は、弥生時代の祖霊信仰、飛鳥時代の皇祖信仰に基づく、地位と資産の継承にある。臣下が「**誅**」(るいしのびごと)すなわち忠誠・服従する様子、またその儀式的場所として、飛鳥浄御原宮内の「御窟殿」(みむろでん)の存在が、「**魂振**」と共に**日本書紀の天武期に多く記録されている。壬申の乱のあとの混乱鎮静**への取組が伺われる。

「**魂振**」については、祭祀を司る物部氏の記事が明確である。以下、石上神宮での行事より(同社には、鎮魂八神と**大直日神**(おおなびのかみ)を祀る天神社がある)饒速日命の御子様に宇摩志麻治命(うましまじのみこと)がおられました。宇摩志麻治命は、初代の天皇である神武天皇と皇后の聖寿の長久を祈られる時、天璽十種瑞宝を用いて鎮魂祭(みたまふりのみまつり)を斎行されました。これが**鎮魂祭**の初めとなったことが『先代旧事本紀』に記されています。この物部氏の鎮魂は、御魂を振動させる「**御魂振り**(みたまふり)」と「**玉の緒**」を結ぶことが中心です。「玉の緒」とは玉を貫きとめる緒(ひも)のことで、玉(たま)と同音の「魂(たま)・命」を結び留めることを表しています。現在も、石上神宮では11月22日夜に「**鎮魂祭(ちんこんさい)**」を、また節分前夜に「**玉の緒祭(たまのおさい)**」を斎行しています。



「古事記原文」 変体漢文 岩波古典文学大系本(訂正 古訓古事記) 近代デジタルライブラリー 国宝「真福寺本」照合済

「伊邪那岐命 と伊邪那美命」

(前略)是以伊邪那伎大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音。**穢國**而在祁理。此二字以音。故、吾者爲御身之**禊**而、到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐 此三字以音。原而、**禊祓**也。故、於投棄御杖所成神名、衝立船戸神。次於投棄御帶所成神名、道之長乳齒神。次於投棄御囊所成神名、時量師神。次於投棄御衣所成神名、和豆良比能宇斯能神。此神名以音。次於投棄御禪所成神名、道俣神。次於投棄御冠所成神名、飽咋之宇斯能神。自宇以下三字以音。次於投棄左御手之手纏所成神名、奧疎神。訓奧云於伎。下效此。訓疎云奢加留。下效此。次奧津那藝佐毘古神。自那以下五字以音。下效此。次奧津甲斐辨羅神。自甲以下四字以音。下效此。次於投棄右御手之手纏所成神名、邊疎神。次邊津那藝佐毘古神。次邊津甲斐辨羅神。右件自船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前、**十二神者**、因脱著身之物、所生神也。於是詔之、上瀨者瀨速、下瀨者瀨弱而、初於中瀨墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神。訓禍云摩賀。下效此。次大禍津日神。此二神者、所到其**穢**繁國之時、因污垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、**神直毘神**。毘字以音。下效此。次**大直毘神**。次**伊豆能賣神**并三神也。伊以下四字以音。次於水底滌時、所成神名、底津綿上津見神。次底箇之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神。次中箇之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神。訓上云宇閑。次上箇之男命。此三柱**綿津見神者**、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音。下效此。故、**阿曇連**等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字以音。其底箇之男命、中箇之男命、上箇之男命三柱神者、**墨江之三前大神**也。於是洗左御目時、所成神名、**天照大御神**。次洗右御目時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**。須佐二字以音。

「天照大神 と須佐之男命」

(前略)故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母母由良邇、此八字以音。下效此。振滌天之眞名并而、佐賀美邇迦美而、自佐下六字以音。下效此。於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命。此神名以音。亦御名、謂奧津嶋比賣命。次市寸嶋上比賣命。亦御名、謂狹依毘賣命。次多岐都比賣命。

(中略)又食物乞大氣津比賣神。爾**大氣都比賣**、**自鼻口及尻**、種種味物取出而、種種作具而進時、**速須佐之男命**、立伺其態、爲**穢**汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生**稻種**、於二耳生**粟**、於鼻生**小豆**、於陰生**麥**、於尻生**大豆**。故是**神産巢日御祖命**、令取茲、成種。

「葦原中國の平定」 天若日子の葬儀

(前略)此時阿遲志貴高日子根神自阿下四字以音。到而、弔天若日子之喪時、自天降到、天若日子之父、亦其妻、皆哭云、我子者不死有祁理。此二字以音。下效此。我君者不死坐祁理云、取懸手足而哭悲也。其過所以者、此二柱神之容姿、甚能相似。故是以過也。於是阿遲志貴高日子根神、大怒曰、我者愛友故弔來耳。何吾比**穢**死人云而、拔所御佩之十掬劔、切伏其喪屋、以足蹶離遣。此者在美濃國藍見河之河上、喪山之者也。其持所切大刀名、謂大量、亦名謂神度劔。

03 けまん結び kaman musubi
男女相愛の契り 仏の力による衆生幸福



我が国の文化源流を古代にもとめる時、その手掛かりは縄文、弥生時代の遺跡や出土品、そして文書、伝承古き神社となる。文書の手掛かり、「古事記」「日本書紀」などの研究は、特に江戸時代の国学者から活況となり、幕末から明治、そして昭和以降の天皇尊厳の変遷を経て、現在に至っている。その間、明治維新後の廃仏棄釈や民間信仰禁止政策、第二次世界大戦後のGHQ神道指令による「国家神道廃止」など、神仏信仰環境は安寧ではなかった。しかし、長い武家政権の末期に起こった国学、その後の神仏混乱を経て続く「記紀研究」は、我が国古代信仰の中に、日本人、日本文化の源流を求める 同じような心情であろう。京都、奈良などへの社寺参拝、浄土教はじめ仏教信仰、歴史的文化財への憧憬、祭りや、しきたり、風習は、なぜ行われるのか。単純に他動的習慣ではない、隠れた特性がそこに存在するはずだ。

「古事記」には、元明天皇期712年、太安万侶より撰上された当時の、皇族、氏族の政治的脚色がある。しかしまた、政治的にしろ、彼らの系譜が関係する様々な神の立場や性格、また、大和・出雲など実際の国土地名が登場する部分に特徴があり、信仰文化の特性や史実が潜んでいる。そして、神々には、祀る神、祀るとともに祀られる神、祀られるだけの神、祀りを要求する崇りの神という性格の違いがあるとされ、天照大御神、大国主たちは、祀るとともに祀られる神である。なぜなら「葦原中国の平定」において、高御産巢日神は常に天照大御神と共に、「日本書紀」では高御産巢日神が単独で派遣する神を命じており、「神武東征」でも同様である。稲羽(因幡)兔救出で、八十神に殺された大穴牟遲神(大国主)を蘇らしたり、少名毘古那神とともに葦原中国を作堅其國と命じたのは、神産巢日神である。つまり、「高御産巢日神」や「神産巢日神」は、天照大御神や大国主が祀る神々である。そして、古事記神代記において、天地初發之時、於高天原で、初めに誕生(存在)したのは「天之御中主神」であり、次にその二柱「巢日神」が誕生した。また、祀られるだけの神は、山神、川海神など、崇りの神は、御諸山上神(美和之大物主神)となる。では、古事記が語る、その初めに誕生し祀りの頂天にある「天之御中主神」とは何か？ どんな信仰、思想が表現されているのだろうか？ どの様に解釈すれば古代の精神を理解できるだろうか？

「天之御中主神」とは何か？ (道教の影響を前提として)

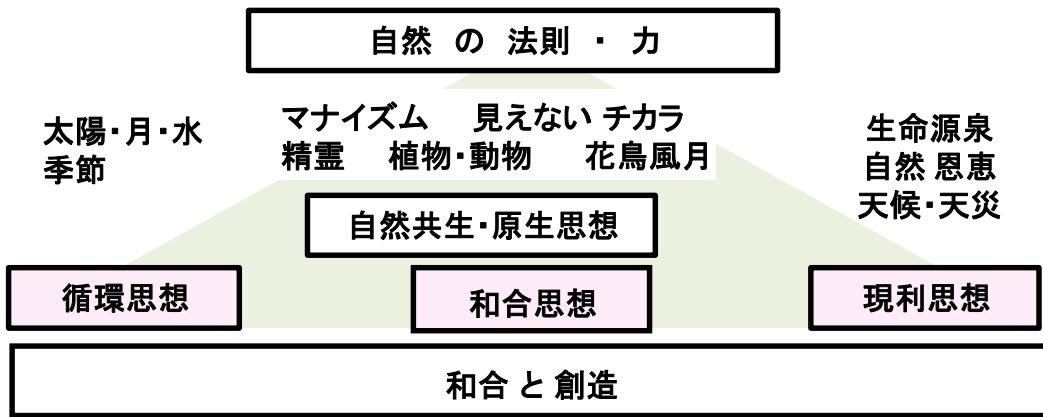
それは、自然の法則・力と考えます。なぜなら、そのあとに誕生した「高御産巢日神」は別名「高木神」、神の依ります神籬(神体木)、天地を繋ぐもの出雲大社、伊勢神宮の心御柱に表現される。そして、「神産巢日神」は、須佐之男命が殺した大氣都比賣から穀物の種を生み、また大国主を蘇らせる循環再生を表す。この神代再生は、世代・時間の継承を表現している。

つまり、その頂天に語られる「天之御中主神」は、「場所」と「時間」の概念で、それぞれ「高御産巢日神」と「神産巢日神」と繋がる、「自然の源、原理」であり、「法則・力」と考えます。

三神は、日本文化の特性として今回仮説した原理を構成する基本要素であり、「天之御中主神」と、天津神系「高御産巢日神」と国津神系「神産巢日神」が、ほぼ同時に誕生することに、異なる信仰文化の「和合」の思想が伺われる。また「産巢」の名を持つ二神は「創造」の象徴でもある。創造されたモノは、人々に「現世利益」をもたらし、神信仰、祭祀の理由となる。

この神を祀る「彌久賀神社」は出雲大社南方 延長五年(927年)『延喜式神名帳』神門郷の筆頭。

日本文化の特性 基本原理の体系



「古事記原文」 変体漢文 岩波古典文学大系本(訂正 古訓古事記) 近代デジタルライブラリー 国宝「真福寺本」照合済

「別天神五柱～神世七代」

天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神。訓高下天云阿麻。下效此。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。次國稚如浮脂而、久羅下那州多陀用幣流之時、流字以上十字以音。如葦牙因萌騰之物而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神。此神名以音。次天之常立神。訓常云登許、訓立云多知。此二柱神亦、獨神成坐而、隱身也。上件五柱神者、別天神。

「伊邪那岐命と伊邪那美命」

於是天神諸命以、詔伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而、言依賜也。故、二柱神立訓立云多多志。天浮橋而、指下其沼矛以畫者、鹽許々袁々呂々邇此七字以音。畫鳴訓鳴云那志。而、引上時、自其矛末垂落之鹽累積、成嶋。是淤能基呂嶋。自淤以下四字以音。

於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿。於是問其妹伊邪那美命曰、汝身者如何成。答曰吾身者、成成不成合處一處在。爾伊邪那岐命詔、我身者、成成而成餘處一處在。故以此吾身成餘處、刺塞汝身不成合處而、以爲生成國土。生奈何。訓生云宇牟。下效此。伊邪那美命、答曰然善。爾伊邪那岐命詔、然者吾與汝行迴逢是天之御柱而、爲美斗能麻具波比。此七字以音。如此之期、乃詔、汝者自右迴逢、我者自左迴逢。約竟迴時、伊邪那美命、先言阿那邇夜志愛上袁登古袁、此十字以音。下效此。後伊邪那岐命、言阿那邇夜志愛上袁登賣袁、各言竟之後、告其妹曰、女人先言不良。雖然久美度邇此四字以音。興而生子、水蛭子。此子者入葦船而流去。次生淡嶋。是亦不入子之例。

「天照大神と須佐之男命」

又食物乞大氣津比賣神。爾大氣都比賣、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆。故是神産巢日御祖命、令取茲、成種。

「大国主神」

於是八上比賣、答八十神言、吾者不聞汝等之言。將嫁大穴牟遲神。故爾八十神怒、欲殺大穴牟遲神、共議而、至伯伎國之手間山本云、赤猪在此山。故、和禮此二字以音。共追下者、汝待取。若不待取者、必將殺汝云而、以火燒似猪大石而轉落。爾追下取時、即於其石所燒著而死。爾其御祖命、哭患而、參上于天、請神産巢日之命時、乃遣蜃貝比賣與蛤貝比賣、令作活。爾蜃貝比賣岐佐宜此三字以音。集而、蛤貝比賣持人而、塗母乳汁者、成麗壯夫訓壯夫云袁等古。而出遊行。

原理を仮説し、信仰・文化の歴史を辿ると、その過程で産霊二神、すなわち「循環的なもの」神産巢日神と、「現利的なもの」高御産巢日神の違いと、その間の「均衡作用」があることに気付く。

仏教では、阿弥陀如来に対する薬師如来や観音菩薩。また、天台智顛の「三諦円融」空仮中の均衡は、それを受け入れることで浄土信仰や禅・日蓮誕生の土壌となった。闘争する武家に対して、静寂なる茶道や禅。茶道では日常に対する非日常を均衡させた作用。絵画では花鳥画に対する水墨画で均衡した。

その均衡をもたらした源が自然の法則・力であり、和合的な現象として現れたと考える。その代表、「神仏習合」は、戦う神と鎮魂の仏であった。

古事記、古代から中世まで日本文化の原理を仮説・検証したが、改めて逆に「均衡」を意識して古事記をふりかえると、産霊二神の中間として「天之御中主神」、また天照大御神と建速須佐之男命の間の「月読命」がその作用で共通していることに気がつく。両者は同時に誕生した活動的な他の二者の間で、無作為な力・作用である「均衡」を象徴しているのではないか。「天之御中主神」と「月読命」は、いずれも天津神・国津神ではなく、ただ存在を記されている。

「天之御中主神」の意味、それは、自然の法則・力と考えた。なぜなら、そのあとに誕生した「高御産巢日神」は別名「高木神」、神の依ります神籬(神体木)、天地を繋ぐもの出雲大社、伊勢神宮の心御柱に表現される。そして、「神産巢日神」は、須佐之男命が殺した大氣都比賣から穀物の種を生み、また大国主を蘇らせる循環再生を表す。この神代再生は、世代・時間の継承を表現している。つまり、その頂天に語られる「天之御中主神」は、「場所」と「時間」の概念で、それぞれ「高御産巢日神」と「神産巢日神」とに繋がる、「自然の源、原理」であり、「法則・力」と考えた。その解釈は誤りではないが、その「自然の法則・力」がもたらした具体的な力、すなわち「均衡作用」とも言える。

とすれば古事記の「月読命」の意味は何か？ その神も同じ作用をもたらし、国譲りを演出したと考える。天照大御神に象徴される「太陽」と建速須佐之男命の「大地」、昼間の太陽は大地を熱くする。しかし、特に晴れた夜には、放射冷却で大地は逆によく冷える。太陽と大地の熱循環(交流)作用が高まっている状態だ。その晴れた夜には「月」がよく見える。太陽と大地の好循環は月の作用と考えたに違いない。自然に敏感で稲作など農耕が主な生活では、ごく自然な発想、信仰と考える。

「国譲り」の主体は大国主とその代理者や天照大御神に派遣された者たちだが、その前に月読命を登場させた意味は、「国譲り」の予言、伏線であろう。二者択一ではなく二者均衡の支点と考える。その存在は、いわゆる二極の「間」と表現したら理解しやすいかもしれない。

自然の法則・力から誕生した和合の神格が、産霊二神を均衡させる「天之御中主神」であり、「月読命」である。では、その神話の基本思想は誰のものか？ 記紀編纂を勅命した人、武力で皇位についた天武天皇は語りづらい。最終的な編集者、藤原不比等にとっては、祖神の活躍が最重要であった。その思想の草案者は、やはり「和合」の思想家、聖徳太子と考える。古事記の神話部分などは国記を反映しただろう、そして十七条憲法とは、均衡させる作用、和合思想で結びつく。その仮定だと、聖徳太子以前に鏡威信が天照大御神の様な固有名詞で信仰化していたことになる。

日本書紀は、推古28(620)年 推古天皇、聖徳太子による歴史書、「天皇記」「国記」「臣・連・伴造・国造百八十部等の本記」が編纂されたと記す。それら書物は、645年(皇極5年)乙巳の変の際に、蘇我蝦夷の家とともに燃やされ、「国記」のみが焼ける前に取り出されて残ったと記録される。「国記」編纂の約100年後、712年「古事記」が、720年には「日本書紀」が撰上された。

京都の月読神社は、顕宗3(487)年、阿閉臣事代(あへのおみことしろ)が朝鮮任那渡航の際、吉岐から分霊した元来は海神。現在は秦氏松尾大社の摂社、その境内に聖徳太子を祀る社がある。月読神社によると、太子は月読神を崇敬したとされる。ここに祀られていることがその証である。

日本文化の特性
基本原理の体系

- 04 修多羅結び shutara musubi
- 05 封じ結び fuji musubi
- 06 大輪結び tairin musubi

